
MONSTER HUNTER第一章～紅衣の女中、砂漠に行く～

後藤正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MONSTER HUNTER第一章〜紅衣の女中、砂漠を行く〜

【Nコード】

N9251I

【作者名】

後藤正人

【あらすじ】

ここは文明の残り香。黒き死神の住まう場所。砂漠に消えた父を探して、ハンターが一人漆黒の角竜へと挑む。夜空を震わせ、その体躯は人の頭上を舐める。人は小さく弱い。しかし胸に秘めた思いは大きく確か。そしてハンターは目にするることとなる。激闘の末。偉大な文明が残した思いと意地を。

装備紹介

登場人物装備一覧

ここではゲームの2次創作として、ゲーム内での設定を書いています。そのため、ゲームそのものを知らない人や、スキルにあまり関心のない人は飛ばして、本編からお読みいただいで結構です。

この小説はモンスターハンター、それもオンラインゲームとして稼働中（2009年12月現在）のモンスターハンターフロンティアオンラインを題材にしています。ただし、ヴァージョンは混ざっており、現在の6.0を完全には反映していないことをお断りしておきます。

このゲームはモンスターハンター2Gやモンスターハンタートリイに比べて防具に設定されているスキルポイントが高い値であるとともに豊富です。そのため、全身を一つの防具でそろえることよりも様々な種類を混ぜ合わせることが一般的になります。

そのため、登場人物の装備の種類が部分によって違うため、主要な登場人物の説明をかねて、このような装備紹介を行うことにしました。

名前：アマランサス・エー

性別：女性

年齢：17

武器：ヘビィボウガン

装備一覧

武器：ヘビイバスタークラブ（カホウ「狼」

頭部：アクラコサージュ + 報珠

胸部：メイドベスト + 仙人珠

腕部：メイドカフス + 剛力珠×3

腰部：メイドスカート + 剛力珠×3

脚部：メイドストッキング + 剛力珠×3

発動スキル

攻撃力UP「大」

見切り+3

激運

火事場力+2

女神の赦し

設定

人とモンスターが命をかけてあいまみえる狩り場で、赤いメイド服に重厚なヘビイボウガンで乗り付ける奇妙な自称メイドさん。妙に間の抜けた話し方と、張り付いた笑顔がその特徴で、本気なのか冗談なのかわからない不思議な人物。

名前：テイルテュ

性別：女性

年齢：19

武器：ハンマー

装備一覧

武器：スイ「狼」 + 剛力珠

頭部：ガルルガフェイク + 剛力珠×2

胸部：レウスSメール + 剛力珠×2

腕部：ディアブローム + 恒久珠

腰部：レウスフォルド + 達人珠

脚部：ディアブログリーヴ + 恒久珠

発動スキル

攻撃力UP「大」

見切り+3

火事場力+2

高級耳栓

アイテム使用強化

設定

若いながらもハンターとしてすぐれた能力を有する女性ハンター。愛用のハンマーを担いで訓練場に足しげく通っている。何か目的があつてのことらしいが、口数が多い方ではないティルテュは誰にもその目的を告げていない。

名前：フィリア

性別：女性

年齢：25

武器：なし

装備一覧

武器：なし

頭部：なし

胴部：なし

腕部：なし

腰部：なし

脚部：なし

発動スキル

なし

設定

猟団「聖堂騎士団」の猟団長を務める女性。やや変わった考え方と行動をする人物である。自身は聖堂に何の関わりもなく、騎士ともまるで関係ないがかっこいいからと猟団名を聖堂騎士団とするよ

うな人物。

名前：アレス

性別：男性

年齢：23

武器：ランス

装備一覧

武器：ハウテングキ「狼」

頭部：リオソウルヘルム + 剛力珠×2

胸部：リオソウルメイル + 剛力珠×2

腕部：リオソウルアーム + 剛力珠×2

腰部：リオソウルフォルド + 剛力珠×2

脚部：リオソウルグリーヴ + 腕力珠×2

発動スキル

攻撃力UP「特大」

見切り+3

ガード性能+2

火事場力+2

調合成功率 - 5%

設定

「夢狩り人アレス」の通り名をもつ凄腕のハンター。かつては王宮に仕えていた騎士であると噂されているが、彼は何も語るうとしない。アレスは誰と群れることなくその過去は依然謎に包まれている。

装備紹介（後書き）

予定では全10話の比較的短いお話にしようと考えています。

今回紹介した2人がクエストに行くお話です。ハンマーとヘビイボウガンの組み合わせは珍しいと思いますが、どちらも私が好んで使っていた武器です。ゲームをした経験を元に、独自解釈を加えて、それでも世界観は崩さないよう注意して書きたいと思います。

4話に登場した2人を新たに追加しました。若干装備が手抜きになっているのは、気のせいです……。

第一話「紅衣の女中と桜色の雌火竜」

セクメーア砂漠。

ここではさわやかな風さえも、太陽にあぶられ地表の放射熱にくすぶられ、すっかりやさぐれてしまう。穏やかな風も人の肌をかすめる頃には熱風に変わってしまうほど劣悪な環境である。岩や木々のような日差しを遮るものが何もない荒涼として砂漠地帯では立っているだけでも汗が噴き出す。かと思えば、夜間は熱を保つものが何もなく、昼の灼熱が恋しくなるほどの冷気が帳となって降りる。

岩場では川が流れ、憩いのオアシスが存在する。しかし、ここには狡猾な鳥竜種から闊達な魚竜種まで、ありとあらゆる生物の縄張りとなっていた。

その川は地底湖にまで通じ、細い洞窟で砂漠、岩場の両方とつながっている。ここは外の暑さとは違って変わって凍てつく冷気が肌を刺す。

暑さに耐えられるだけでも、寒さに強いだけでも生きていくことはできない。

ここは、そんな過酷な世界だった。

砂漠はひどい。

日の明かりの下では猛烈に燃え上がらせるのに、日が落ちた途端、

冷たく突き放してくる。

気まぐれな恋人のような場所。

それでも懲りない男がいるように、だまされ続ける女が後を絶たないように、こんな場所にも生命の営みは存在する。

茶と緑のまだら模様の皮をもつ鳥竜種ゲネポスが集団で狩りを行っていた。たくましい後ろ足で駆け回り、前足はほとんど退化している。前傾姿勢で突き出された細い顔には鋭い牙が並んでいる。この牙に狙われた哀れな獲物は、草食種アプトノス。

アプトノスは太い四肢で体を支えながら、必死に逃げている。細長く盛り上がった背中にはすでにいくつもの傷がついている。ゲネポスにつけられたものだ。

ゲネポスが細いが、しかしたくましい脚を使い跳躍すると、次々と跳びかかる。ゲネポスは申し訳程度についている前脚でアプトノスにとりつこうとするが、あっさりと振り払われる。大きさなら人の大人ほどもあるゲネポスだが、アプトノスは四足歩行でどっしりとした体躯がある。ゲネポスにどれほど鋭利な鉤爪があっても力比べでは相手にならない。

だが、ゲネポスには必殺の武器がある。縦に細長い顎のその奥に麻痺牙と呼ばれる、文字通り麻痺毒を含んだ牙がある。

この牙を一度突き立ててしまえばアプトノスほどの巨体でも身動きはとれない。そうなればあとは数にまかせて息の根を止めてしまえる。

逃げ回り、アプトノスには疲れが見え始めていた。

ゲネポスは口々に奇声を上げながらアプトノスに殺到する。

だがそれは、勝利の確信ではなく、致命的な油断であった。

先頭のゲネポスが突然高く舞い上がった。

跳躍したわけではない。足下の砂に突き飛ばされたように、悲鳴を上げながら砂へと叩きつけられる。

このときゲネポスたちはようやく気づいた。狩りに夢中になるあまり、来てはいけない場所に来てしまったのだと。

砂が弾け跳ぶ。そこから姿を現したのは三角形をした砂にまみれた頭だった。

魚竜種、砂竜ガレオス。ゲネポスより大きく、アプトノスの体ほどの大きさがある。その巨体できめの細かい砂をかき分けて砂漠を泳ぐ魚である。その性質は凶暴な肉食性。アプトノスにとってゲネポスが捕食者であるように、砂竜はゲネポスにとっての捕食者であった。

ガレオスは砂から上体だけをつきだした姿勢で、大きく口を開いた。横へと突き出した大きなヒレが上体を支えている。吸い込んだ砂を吐き出そうとしているのである。

強靱な喉元で砂が圧縮され、まさに発射される。

単なる砂の塊が長時間の潜砂を可能とするガレオスの呼吸器によ

って射出される。砂でできているとは思えないほどの威力でゲネポスを叩き上げた。直撃を食らったゲネポスは動かない。

仲間のゲネポスたちは我先に逃げ出した。

ゲネポスは気づかないうちにガレオスの縄張りに入り込んでいたのだ。そして、ガレオスもまた、群れをなす生き物である。逃げるゲネポスを追いかける背ビレは三つ。それぞれが砂を切り裂いてゲネポスに迫る。

その時のことだった。

逃げることに夢中なゲネポスにそんな余裕はない。砂中に体の大半を潜らせているガレオスには見えていない。

中空に人の拳くらいの大きさの丸い物体が放り投げられた。何かの袋のような黒い物体に、短い導火線が繋がっている。導火線の火が袋の中に吸い込まれる。

すると、爆発を伴わないとてつもなく甲高い音が響いた。

砂の中にまで響くその音は、目が退化し、代わりに聴力を敏感にさせていたガレオスの鼓膜を直撃する。三匹のガレオスは飛び出して砂の上で跳ね回る。陸に打ち上げられた魚と同じ動きである。

一時的に聴覚を麻痺させられたガレオスは暴れ周り、砂を巻き上げた。

その砂煙に紛れて、人影がガレオスに近づいていった。数は四人それぞれが巨大な武器を背負っている。

人影が砂煙に入つてすぐに、三匹分の断末魔の声が聞こえた。ガレオスは砂上にその巨体を横たえ息絶えていた。

彼らはハンターだった。モンスターを専門に狩るモンスターハンターである。

今回の目的は増えすぎたガレオスの狩猟。ガレオスが増えすぎることで、この地方の交易ルートが危険にさらされたり、生態系が不安定になることを懸念して狩猟に赴いたのである。

砂漠に限らない。この世界ではモンスターハンターが生態系の一部として、自然界に確かに組み込まれていた。その素材を剥ぎ、時に数を調整する存在として、食物連鎖の頂点に力づくで君臨しているのである。

それは当然過酷なもので、命を失う者も決して少なくない。

だがそれでも、ハンターたちは狩りに出向く。その理由はさまざままで、扱う武具も多種多様。

そして、ハンターたちは最高でも四名というわずかな数人で、時に驚くほど大きなモンスターさえも狩りの対象とする。

砂漠の夜を、桜色の翼が滑空していた。

大きい。とても大きな翼だった。

ゲネポスが小さく見える。ガレオスなど必死に背伸びしてもようやくその腹に頭が届く程度だろう。

今の砂漠に彼女にかなう者はいない。

その巨体を支える力強い二本の脚。後ろへと突き出された尻尾は丸太と表現するほかない。翼は広く、そして巨大。飛竜種と呼ばれるモンスターの特徴をすべて兼ね備えた彼女は、まさに飛竜の中の飛竜、火竜と呼ばれる種であった。その雌、雌火竜リオレイアがその名である。

本来は身を包む甲殻が濃い緑色をした種であるが、この個体はそれが桜色をしていた。稀に観察されるリオレイアの亜種である。桜火竜と呼ばれる種である。

亜種はほかの種でも確認されているが、種によっては色の違いのみならず、その体の組織が極端に異なっている場合がある。進化の可能性を探る種として学者たちは注目している。だが、少なくとも自然界、砂漠においてそんなことを気にする者はいない。

それが進化体系のどこに位置づけられるものであれ、桜火竜は飛竜であり、絶対の捕食者であることに変わりはない。鳥竜種も魚竜種も、無論草食種も捕食の対象にしか見えていない。

だが、彼女は思い知ることになるだろう。この世に絶対というものはなく、そして、今夜は長い夜になるということを。

夜の帳を裂いて、強烈な閃光が弾けた。

一瞬で視力を奪われたリオレイア亜種が砂漠の砂を踏みしめて後ずさりする。

視力はしばらく回復しない。桜火竜はその場から動こうとせず、がむしゃらに見えない敵喰らいいつこうと歯を打ち鳴らす。胴体から横へと伸びた首の先にある頭には鋭い牙が並び、一噛みでも恐ろしい威力を発揮するだろう。

だが、狙いもなく噛みついたところで、ただ風を食らうだけだった。

その隙を逃さず、一人のハンターが果敢に挑みかかる。

胴と腰は雄の火竜、単に火竜と呼ばれるリオレイウスから剥ぎ取れる甲殻と鱗をふんだんに用いた強固な防具で覆われている。腕と脚を守る防具は、これもまた飛竜種、角竜ディアブロスを狩猟しなければならぬ鎧であった。

リオレイウス装備は、鎧というよりは甲殻と鱗で火竜リオレイウスの体表を再現したかのようなくすんだ赤が力強い。

ディアブロス装備は太く頑強な出で立ちである。ところどころに細かい角があしらわれ、こちらもまさに角竜を体現している。

防具のデザインから女性であるとわかるが、そのたくましさほどの男性と比べても見劣りするものではないだろう。

頭部は黒狼鳥という鳥竜種の中では異端ともいえる強さを誇る黒狼鳥イヤンガルガの鋭い嘴を模した兜に包まれているが、装甲の

隙間から垣間見える眼光は鋭く貫いてくるようである。

そして、手には、人の胴体ほどもあるハンマーが握られていた。頭部同様、イヤンガルルガの鋭利な嘴をその甲殻で固定したハンマー、スイ「狼」。

ハンターはハンマーを振りかぶって構え、力を強く溜める。リオレイア亜種の、人の体くらいの高さにある頭を見据えると、勢いよく振り上げ、そして叩きつけた。

頑強な甲殻に阻まれ、ハンマーは鈍い音を上げた。甲殻は破れなかったが、確実にダメージは通っている。ハンターはすぐに追撃を開始する。

リズムよくハンマーを一撃、二撃とたたき込むと、最後の三打目は体を回転させながら大きく振り上げた。

すべての打撃が頭を芯からとらえ、たまらず桜火竜がうめく。

だが、時間切れだった。

リオレイア亜種は首を左右に振る。視力が戻った証だ。敵であるハンターの姿を見つけるとすぐに、閉じられた口から火と煙を漏らしながらハンターの方へと首を向けた。

火竜が火竜と呼ばれる所以。

開かれた口から膨大な熱量を抱えた火球が放たれた。

火に強いリオレウスやディアブロスの防具を身につけていようと、

直撃を食らえばただではすまない。そしてハンマーには他のハンターが用いるランスや片手剣のような盾はない。

ガードはできず、かわすしかない。

ハンターは跳んだ。体を縦に一回転させ、火球の軌道から体を外す。火の球が砂にぶつかり、火柱と煙とを巻き起こす。くすぶる炎に照らされながら、ハンターは今一度構えた。

全身の筋肉が緊張し、力が高まっていく。

桜火竜が2本の脚を器用に動かし、逃げたハンターの方へと向き直ろうとする。

その瞬間、ハンターが前へと飛び出した。

後ろに構えていたハンマーを一気に前へと横薙ぎに払う。黒狼鳥の鋭い嘴が火竜の横っ面に当たると、すぐさま返す刀で反対側から振り上げる。左右から挟み撃ちのように襲った衝撃は激しく脳を揺らし、桜火竜の巨体を沈ませる。一時的なめまいを起こして、竜は倒れ込んだ。

ハンターはこの隙を見逃さない。先の三連打を再び頭へと叩き込む。

ハンマーを叩きつける度、頭が砂に埋もれていく。度重なる衝撃に絶えられなくなった甲殻が弾け、ところどころが禿げたようになった。

人でありながら巨大な飛竜をも圧倒する。それがハンターであり、

その得物にハンマーを選んだ女性は、その名をティルテユと言った。

そして、ティルテユの相棒であるハンター、アマランサスが離れた位置でヘビィボウガンを腰ために構えていた。盾蟹と呼ばれるダイミョウザザミの甲殻が無慈悲な巨砲に独特の光沢を与えている。まるで獲物の血を吸ったかのような鮮やかな赤。

その主、アマランサスもまた、赤い装束でその身を包んでいた。

胸元を強調する赤が彩り鮮やか。腰のスカートには純白のエプロンが備えられていて、ちよっと汚れているのは働き者の証拠。広がった袖に施された刺繍ガチャムポイント。頭は水晶を模したコサージュでかわいらしさを演出。

お気に入りのポーチに通常弾、貫通弾、水冷弾いっぱい詰め込みました。

今日の気分はダイミョウザザミ。

盾蟹なんて呼ばれるくらい、とっても堅い甲殻で、水冷弾の水圧にも耐えられますよう銃身を保護したヘビィボウガン、ヘビィバスタークラブがラッキーアイテム。

ヘビィバスタークラブの銃口から、水がたくさん飛び出して、桜火竜を弱らせます。

弾けた水は翼の上でワルツを踊ると、雌火竜の背中へと舞台を移します。たくさんの水圧が暴れています。すると、あら大変、翼の

爪が弾け跳びます。

さあさあ、ヘビィボウガンをしまいましょ。真ん中で折り曲げて、背中にしっかりと背負い込みます。

ティルテュが注意を引きつけているその隙に、私は尻尾を狙います。

取り出したるはブーメラン。小さな竜骨を砥石で親切丁寧に研ぎました。鋭く細く、鋭利に尻尾が切れますようにと願いを込めて。

桜火竜が起きあがります。でもその視線はティルテュにだけ向けられます。

ほんのちよっぴり嫉妬して、ブーメランを投げつけます。

「えい！やあ！」。

綺麗な軌跡を描いて、ブーメランは尻尾に当たります。しっかりと切れ目を入れて元氣に戻ってくる子もいれば、突き刺さったまま戻ってこない子も。

でもそうして、尻尾は少しずつ切れそうになっていきました。

アマランサスは、さすがにガンナーだけあっていい狙いをしている。ブーメランは確実に尻尾を捉え、甲殻を劣化させていた。

だが、ブーメランだけで尻尾を切り落とすのは心許ないことも事

実だった。

ティルテュは動いた。

雌火竜の首の下をくぐり抜けて、近寄ってみると木の幹としか思えないような脚を殴りつける。頭に比べ、尻尾は高い位置にあつてハンマーでは届かない。ならば倒してしまえばいいだけの話だ。

急に目の前の獲物がいなくなったことに混乱しているのだろう。無意味にあたりをうかがうようにリオレイアが首を伸ばした。

その隙にハンマーの三連打を脚に見舞ってやる。体を支えているだけあつて、脚の甲殻は頭に比べて堅い。手にしびれを覚えるほどだ。

「ええい、相変わらずなんて堅さだ！」。

雌火竜に限らず、飛竜はその多くが強固な甲殻を有している。そのため防具に使用すれば命を守ってくれるが、敵に回せば厄介極まりない。一撃で破壊することは不可能であるため、いつも手数を重ねた戦い方を強いられる。

一撃の威力が高いハンマーであつてもそれは同じだった。

脚は一度三連続で叩いたところでまだ飛竜の巨大な体重を支える力を有していた。それどころか、それらの脚を軸に尻尾を大きく回転させ始めた。

直撃を食らえば簡単に吹き飛ばされる。尻尾が兜をかすめただけでも大きなダメージを食らうだろう。

腹の下は比較的安全な立ち位置ではあったが、絶えず脚踏みにさらされる位置でもある。

ハンマーを振りかぶるうにも、力を込める瞬間に雌火竜の脚爪が体をかすめると痛みについて攻撃が中断する。

このまま体力を削られるのはまずい。

そう考えていた時、妙に緊張感のない高い声が耳に届いた。

「ティルテュ、危ないですよ」。

見ると、火を噴く導火線がつけられた黄色い樽がこちらへと飛んでいた。

投げタル爆弾。

小さなタルに火薬草と呼ばれるわずかな衝撃で発火する植物を詰め込んだ小タル爆弾。本来は設置するような使い方ができないこの爆弾を投擲できるように改良されたもので、離れた位置からの攻撃が可能となる。威力はタルの規模に見合った小さなものだが、人が爆発に巻き込まれれば無様に火だるまとなって転げるほかないだらう。

「無茶をする！」。

ティルテュは大慌てで腹の下から跳びだした。タイミングを見計らう余裕はなかったが、幸い尻尾にぶつけられることもなかった。

すぐ後ろから爆発音が聞こえた。続いて、砂を揺らす地響き。

見ると、リオレイア亜種が倒れてもがいていた。片足には爆発による焦げあとがついている。手投げタル爆弾がだめ押しの一発になったらしい。

狙っていたのならたいしたものだ。

ティルテュはすぐさま地べたに横たえられている尻尾にとりついた。

所々がブーメランによる切り傷と、突き刺さったブーメランで覆われ、だいぶ痛んでいるようだ。

スイ「狼」を、わざわざ突き刺さったままのブーメランにぶつけてやる。打つ度に甲殻が変形し、ブーメランが深々と突き刺さっていく。

だが、ハンマーで尻尾を切ることはどうしてもできない。ブーメランをどれだけ深く押し込めようと、最後の一打を切り傷周りの組織が邪魔をする。まさか、強靱な筋繊維と甲殻をまとめて壊すなんてできるはずもない。

そうしている内に、桜火竜が立ち上がった。

位置がまずい。尻尾の横にいたのだ。もう一度尻尾を振り回されては間違いなく間合いに入る。

急いで尻尾の届く範囲から逃れると、案の定、リオレイアは尻尾を振りながら回転し始めた。

こうなるともはや結界も同然だった。近寄れば吹っ飛ばされる。

「面倒なことを……」。

しばらくは、桜火竜のダンスを眺めるしかないことが、なんとも口惜しい。

火竜さんは尻尾を振って回ってます。

そんなに振って大丈夫でしょうか。尻尾はもう、だいぶ痛んでるのに。激しく振ったら傷が開いてしまうかもしれません。

それに、尻尾を振る動作は毎回同じです。

これではまるで、タイミングを教えてくださいているかのよう。ありがとう、桜火竜さん。

今研ぎ終えたばかりの、とっておきのブーメランがあります。

狙うタイミングは、尻尾の振る速度が最速で、最高の遠心力がかかる瞬間です。尻尾そのものの重さが筋肉を大きく引き延ばして、わずかな力でも切れるからです。

「えい、や〜！」。

振りかぶって投げました。

ブーメランは高速で回転して、丸い刃のように見えます。狙いは正確。タイミングもばっちり。

すべての条件がそろっていました。

ブーメランは残された、最後の筋肉を一筋切断すると、尻尾が綺麗に切り落とされました。

桜火竜さんはかわいそう。痛みをこらえて転げ回っています。

でも、そこはさすがの飛竜さん。

出血もまもなく収まると、すぐに立ち上がりました。その目は怒りに血走って、私とティルテュを睨みつけていました。

第一話「紅衣の女中と桜色の雌火竜」(後書き)

第二話「紅衣の女中とハンマー使いのお嬢様」(前書き)

ちょっとややこしいかもしれませんが、アマランサスとティルテユがリオレイア亜種のクエストに出る前のお話です。

時間軸に注意してお読みください。

第二話「紅衣の女中とハンマー使いのお嬢様」

ドンドルマの街。切り立った山岳地帯に無数に走る谷の中に建造された街である。

本来ならこのような要害は輸送の妨げにもなるため、街として発展することは少ない。だが、この街はこの地方では一番の街であった。

それには無論理由がある。

このレムリア大陸の中央に存在するこの街の周りは密林や樹海に代表されるような大型モンスターが生息する豊かな自然に恵まれている。さらに、火山など、希少な鉱物が多数産出する地形に近いことはハンターにとってこの上ない魅力である。

この街はハンターによって発展した街であると言っても過言ではない。

そのためこの街ではハンターのための施設が多数存在していた。

武器工房。

武器や防具の生産、強化を専門に行う工房である。高い加工技術を持ち、素材と資金次第で武器は生まれ変わる。

マイハウス。街にすむハンターたちは専用の家を与えられる。ハンターランク、HRによってその規模は異なるため、より広い部屋にすむことはステータスでもある。

そして、訓練場。

ハンターが決められた武具と定まったモンスターを相手に狩りの疑似体験を行う場である。

だが、訓練とは名ばかりで、新米ハンターでは手も足もでないようなクエストが並ぶ。狩猟訓練は実地で行う訓練であるため、地形を把握していなければ道に迷うだけだろう。闘技訓練はアイテムの持ち込みまで制限された状態で大型モンスターと対峙しなくてはならない。

ハンターを取り仕切るギルドが一部武具の生産、強化に訓練を終えた証として授与されるコインを必須としている場合もあり、訓練場に足を運ぶハンターは少なくない。

アマランサスは、今日も訓練場に来ています。ちょうどクエスト、「激闘！ 二角・二頭の暴君！」を終えてきたばかりです。

狭い闘技場内で角竜ディアブロス2頭と同時に闘うクエストで、とても大変です。だって、意地悪な教官はお気に入りのお洋服を着せてくれません。貸し出されたむさ苦しい防具を使わせられるなんて、あんまりです。でも、ヘビィボウガンを好き勝手にぶっ放してもいいから、許してあげます。

それに、今回はお目当ての「古龍のコイン」が2枚もできました。とても珍しくて、貴重なコインなんですよ。

これでお気に入りのメイド服を強化できそうです。カフスとスカートの強化が終えられそうです。

最後のストッキングを強化すれば完成です。

古龍のコインあと1枚。がんばりましょう。

そんなふうには決意を新たにしている内に、受付にまで戻ってきてしまいました。

闘技場から細い通路を抜けた先、右側には受付のカウンターが並びます。ヘルパーっていう緑の制服をきた受付のみなさんと手を振り合って、通り抜けます。その反対側は大きく開けて、コンサートホールになっています。

もうすっかり夜です。正面の階段を上った先にある扉のない通路は直接外につながっています。そこには、もう月が上がっている様子がはっきりと見えました。

少し頑張りすぎちゃったみたいです。

でも、こんな時間ならいいこともあります。

ほら、綺麗な歌声が聞こえてきました。夜はいつも歌姫さまが歌を歌ってくれます。歌詞をもってきてお願いすればリクエストにも応じてくれるんですよ。

アマランサスは上機嫌で椅子に座りました。

いつも適度に椅子があいていて、静かに歌を楽しみたい人ばかり

が集まるから好きです。

聞きほれていると、何の気なしに四つ隣の椅子に女性が座っていることに気づきました。

別に姿が珍しいからじゃありません。

胴から腰にかけてをリオレウス、手足をディアブロス装備で固めて、椅子の前のテーブルにガルルガフェイクをおいています。

歌姫さまと同じ出身なのでしょう。彫りの深い褐色の肌をしていて、ウィンドボブの似合う美人さんです。背が高くて物静かな雰囲気クール・ビューター。

歌声に聞き入っている様子でしたので、歌が終わるのを待って話しかけることにしました。

だって、訓練場では何度も顔を見ているのに、まだ一度も話したことないんですもん。

歌はいい。どんなものでもいいという訳ではないが、ここの歌姫はどこか懐かしさを感じさせるようないい声だ。訓練の合間に聞くと、疲れた体に染み渡る。

名残惜しいが、歌は終わりを告げた。もっとも、後ろ髪引かれるくらいがちょうどいいのかもしれない。また次を聞くまでの間楽しみができる。

今日はもう帰るとしよう。

ティルテュは立ち上がり、マイハウスに戻ろうとする。すると、女が1人近寄ってきた。

メイドと呼ばれる服に全身を包み、頭は髪飾りをつけた程度。背に赤いヘビイボウガンを背負ってなければ受付と見間違う。張り付いたような笑顔はかわいらしいと言えなくもなく、服は似合っていた。こちらに手を振りながら歩み寄ってきた。確か、何回か同じ訓練をしたことがある。

「こんばんは」。

妙に高く、甘ったるい声だ。ティルテュは普段聞きなれた自分の低い声を思い浮かべて苦笑する。

軽く手を振り、挨拶を返しておいた。

メイドはスカートをつまみ上げ、恭しく礼をする。

「私はアマランサスともうします。以後お見知り置きを」。

まるで自分とはタイプが違う。どうも苦手意識が芽生えたが、無視しては礼節に反する。

「ああ、私はティルテュだ。よろしくな」。

手にはディアブロスアームをつけたままだが、ハンターたちの集まりならわざわざ装備を外す必要もない。わざわざ相手に着脱に手間のかかる防具を外させるといふことの方が不躰と判断する連中の

集まりだからだ。

もっとも、アマランサスは薄手の手袋をつけているだけだが。

手を離す。すると間髪いれずアマランサスが会話を続ける。

「ティルテユさんとは、よく、訓練でお一緒にしますよね」。

ティルテユはよく角竜の訓練を受けている。多くの者はコインの中でも特に珍しい古龍のコイン目当てのようだが、ティルテユは違う。だが、わざわざ訳を話す義理はない。呼ぶときにさん付けする必要はないとだけ答えておくと、アマランサスはわかったように手を叩いた。

「ティルテユもメイド服がお目当てですね」。

それだけは断じて否定させていただく。

「いや、それは違う！断じて違う！」。

手を大きく振って否定する。目の前の少女が着ている服が自分に似合うはずがない。

アマランサスは残念そうにしていた。

「え〜」。

だが、それは声だけで、顔は相変わらず笑顔のまま。無表情とは反対の意味で感情の起伏が読みとりにくい。

やはり、この少女は苦手だ。早めに話を切り上げてしまいたい。

何かうまく逃れられるような話題はないだろうか。そう探していると、よくないものを見てしまう。

それはまだハンター装備と呼ばれる、モンスターの皮と鉱石を繋ぎ合わせただけのありふれた装備をした2人の若者だった。おそらくは一四、五。ハンターになって、この街を訪れたばかりの子どもだろう。

プライドばかり高くて、まだ能力が伴っていない。それでも意識のどこかでそのことを理解しているのだろう。周りを注意深く見回しては、誰か自分より劣っているもの、違うものを探して見下そうとする。

そうすることでは、自分のちっぽけなプライドを守れないような年頃だ。

どちらかというと軽薄な印象を受ける少年がアマランサスを指さす。

「なんだよあれ」。

仲間がその態度をたしなめるが、少年に聞く様子はない。恰好の獲物が見つかったとばかりに笑い声をあげた。

「あれでハンターかよ、それに、かわいこぶってよ」。

あと少し、自分の弱さを認める強さがあれば人をバカにする必要もないだろうに。それだけの強さがあれば、自分を冷静にみるこ

のできる観察眼をもつことを意味するし、それはハンターとして成長するために大きな力になる。

彼のためにも、アマランサスのためにも、注意してやる必要があるようだ。

「おい、おまえた……」。

声をかけようとした。だが、それは叶わなかった。

アマランサスが背中のヘビィボウガンを右脇の下に構えた。ヘビィボウガンは中折れ式と呼ばれるフレームが中腹で一八〇度可動する構造をしている。ストックの下にバレルが折りたたまれることで背中に背負うに適した大きさになるのである。アマランサスは銃身を伸ばし、ヘビィボウガンを本来の姿、長大なライフルへと変化させた。

まさか、こんな街中で発砲するつもりなのだろうか。コンサートホールの空気が張り詰めた。

アマランサスは笑顔のまま、少年たちに向き直った。少年が身構える。すると、赤い甲殻が使用されたヘビィボウガン、ヘビィバスタークラブが宙を舞った。アマランサスが放り投げたのである。

赤いライフルが弧を描いて、テーブルの一つに落ちた。すると、木が裂ける音がして、テーブルが完全に潰れてしまった。

絶句する少年たち。

アマランサスは微笑んだまま、彼らに近寄っていった。

「女の子を眺めてもいいのは、素敵な恋人だけですよ」。

笑っているのに、その笑顔はなんとも恐ろしい。まるで夢見る乙女のように手を胸の前で組んでいた。ただ、そこから、拳のなる音が聞こえている。

ずいぶんと不自然な光景だが、考えてみれば当たり前のことだ。

メイドは強化と生産に多種多様なコインを必要とする。それには牙獣種のような獰猛な獣を相手にするクエストも含まれれば、巨大なことで知られる魚竜種を捕獲しなくてはならない訓練もある。

少なくとも、新米ハンターが着ることができないものではない。

加えて、使用しているヘビーボウガンはヘビーバスタークラブ。甲殻種の中でも強固なことで知られる盾蟹。さらにその中でも特に強力な個体を狩猟しなければならぬ高性能のボウガンだ。

アマランサスが確かな実力を備えたガンナーであることは疑いがない。

少年二人は謝るだの、命乞いをするなどして、全力で逃げ出した。

始終笑顔であったため、それこそ何事もなかったようにアマランサスは振り返った。ただ、テーブルを粉碎したヘビーボウガンを拾い上げる姿は、メイド服とあいまってずいぶんとシユールだ。

ヘビーボウガンを折りたたみながら、アマランサスはティルテュに微笑みかけた。

「ねえ、ティルテュ、一緒にクエストに行きませんか？」。

手際よく、ヘビィボウガンを担ぎなおした。それだけでもずいぶん扱いなれていることはわかる。だが、実力以前にクエストの誘いを受けるわけにはいかない訳がある。唐突であることはもちろんだが、それ以上に、ティルテュには外せない目的があった。

「いや、すまない、私にはすることが……」。

掌を相手に見せる形で拒絶の意志を示そうとした。すると、アマランススは両手で包み込むように掴んできた。握りしめられている。ディアブロスの甲殻を通してその力強さが伝わってくる。

「ちょっと砂漠に夜桜を見に行くだけですよ」。

砂漠に花は咲かない。サボテンが唯一の例外であるが、砂漠の片隅にひっそりと咲く花をわざわざ見に行く奇特な者はそうはいないだろう。

アマランススの場合、そんな希少種に分類されるおそれがあったが、今は繁殖期のただ中である。

この時期、砂漠には桜が舞う。陸の女王の異名をもつリオレイア、その亜種である桜火竜が目撃される時期だった。

砂漠の夜。

ちょうど、様子を見ておきたかった場所と時間でもある。

まさかそれを知つてのことではないだろう。だが、アマランサスの申し出は渡りに船だった。

ティルテュは、その申し出を受けることにした。

狩り場に向かう方法は、場所によって異なる。

俗に下位と呼ばれる比較のおとなしい個体が多い場所は船や竜車でベース・キャンプにまで運ばれることがほとんどである。そこで多くのハンターはギルドからの支給品で準備を整え、支給品の一つである地図を頼りに狩りに赴くのである。

だが、上位と呼ばれる凶暴な個体が闊歩する場所では気球で運ばれる。あまり地表にとどまてはられないという理由でベース・キャンプどころか、ハンターがバラバラの場所にあわただしく降ろされることも多い。

自分の状況を把握すること。地図を頭に入れること。支給品に頼らず、必要なものをすべて判断し、用意すること。それができなければ上位のクエストを受注する資格はないと言えた。

気球に揺られ、ティルテュは狩りの準備を開始する。

頭を除いて、すでに防具は身につけている。胴と腰のリオレウス装備。これは上位クエスト受注が許された初めてのクエストでしめた火竜から作り出した。

打ち捨てられた古塔で奴とは対峙した。慣れた相手のつもりだっ

た。甘く見ていたのかもしれない。行動のパターンは読めている。多少強力な個体であっても問題ないだろうと。

だが、結果は無様なものだった。

下位と同じように殴りつけても、奴は怯まなかった。本当に攻撃が効果を上げているのかわからなくなった。同じようなりオレウスの攻撃は、信じられないほどの痛みをもたらした。同じように攻撃できず、同じような攻撃を受けることはできない。狩りの方法は変えざるを得なかった。

下位なら多少の攻撃を受けることを覚悟して攻撃を続けることができるような場合でも、上位ではより慎重に立ち回らざるを得ない。

より多くの時間がかかり、それに比例して回復薬の消費量が跳ね上がる。

仲間の一人が尻尾をまともに喰らい、身動き一つとれなくなった。火球の直撃を浴びた者は、このクエストを最後にハンターを引退せざるを得なかったそうだ。

二人が倒れ、テイルテュは残された仲間とそれでも火竜に挑んだ。リタイアした方がいいのではないか。死ぬかもしれない。だが、そんな後ろ向きな気持ちで勝てる相手ではないと、自らを奮い立たせた。

決して大きな個体ではなかったが、その火竜はとてつもない大きさに思えた。

そんな巨体が断末魔とともに崩れ落ちたときの喜びは、今でも忘

れることができない。

高慢への戒め。それが今は体を守る。

そして、腕と足を守るディアブロス装備は、まったく逆の意味を持つ。

上位に上がり、初めてのクエストを終えた時、ティルテュは自分の未熟を痛感した。それから決して準備を怠らず、モンスターに關しても徹底的に調べあげた。どのようなアイテムが有効か。打ち込むべき部位はどこか。また、その生息範囲は。

上位と下位では同じ狩猟方法は通用しなかったが、しかし下位で培った経験は無駄ではなかった。そして、上位の世界を垣間見ることができた。

続いて行ったディアブロス狩猟では油断も慢心もなく望むことができた。

アイテムを駆使し、無理をせず相手を追いつめていく。それは、ハンターになりたての頃と同じ心境で、しかし確実に成長している自分を感じることができた。

この経験は、今では自信と誇りとなって腕と脚を守る。

そして、ガルルガフェイク。黒狼鳥イヤンガルルガの顔を模した兜をかぶる。

これで全体が完成し、体に力がみなぎる。それは気分の問題ばかりではなく、これらの防具はそれ自体が適度な重さで筋肉を刺激し、

攻撃力を高める。それとともに、間接の動かし安さを考慮した作りにもなっている。攻撃をつまぐ急所に当てることができるだろう。

リオレイア亜種。

相手にとって不足はなく、いい狩りができそうだ。

昔はもつと鮮やかな赤でした。でもお洗濯するとどうしてもくすんでしまいます。ベストを眺めるとちょっと悲しい気分。

でもお気に入りのスカートをはいて気分転換。ストックキングさん、脚を細く見せてくださいね。

カフスはばっちり。日焼け対策も忘れません。

あ、でも今は夜でした。うっかりです。

鏡を覗いてコサージュと髪型をチェックします。うん、ばっちり。ウイंकを決めて、これで準備は完了です。

でも、どうしてでしょう。

ティルテュさんがこっちを見て、あきれたような、ある意味では関心したような独特の雰囲気醸し出していました。

第二話「紅衣の女中とハンマー使いのお嬢様」(後書き)

フロンティア、現在の7・0(2009年12月15日現在)では、街が取り潰されていくことができませぬ。歌姫さん、ときどき聴きにいくのが好きでしたが、今何処で何をしているのでしょうかね。

第三話「紅衣の女中と始まりの足音」(前書き)

無事に二話更新。でも、話はあるまり進んでません……。

第三話「紅衣の女中と始まりの足音」

尻尾を切り落とされ、脆い部位を破壊し尽くされた桜色の雌火竜は大空へと舞い上がった。逃げたのだ。

弱った体力を回復させ、失った血を作り出すまでの時間を稼ぐつもりなのだ。それだけ弱っている証拠でもある。だが、それを喜んではいけない。テイルテュは急いでハンマーを担いで、アイテム・ポーチから閃光玉を取り出した。

核となる石ころや鉄鉱石にネンチャク草と呼ばれる粘着質を分泌する植物が巻き付けられ、素材玉は作られる。閃光玉とは素材玉の表面に光蟲がまんべんなく張り付けられたものだ。体内に発光する物質をため込むこの虫を利用することで、一瞬ながら膨大な光量を得ることができる。

うまくいけばレイアの目をくらませて、たたき落としてやる。

「逃がすか！」

テイルテュは閃光玉を持つ手に力を込めた。光蟲が潰れ、発光液がネンチャク草に絡めとられる。素材玉の表面は発光液まみれになった。

複数匹の光蟲から流れ出た発光液が素材玉の上で混ざりあう。一定濃度になった途端に発光し始めるため、残された時間はほんの数秒。

その間に上空へと、カ一杯に投げる。頭上の遙か高い位置で光が弾けた。ほんの一瞬ではあるが、夜中の夜明けとも言えるほどの光が放たれる。

だが、桜火竜はすでに上空高くに飛んでいた。逃がしたらしい。

飛竜などの大型モンスターはその巨体に見合う、恐るべき生命力を有している。体力はもとより、その回復力は目を見張るものがある。

睡眠をとると、すさまじい速度で体力を回復させることができるのである。さすがに破壊した部位の再生まではできないが、与えたダメージを回復されては厄介だ。

テイルテュは息を大きく吸い込んだ。

闇夜の冷たい外気が鼻孔を刺す。同時に独特な臭気を捉えた。ハンターがモンスターの位置を特定するために使用するペイントボールの臭いだ。ペイントボールはモンスターにあらかじめ投げつけておかなければならないという不便はあるが、訓練を積んだハンターがその臭いを嗅げばその方角と距離がわかる。

方角は北西。距離は近い。

「どうやら、九番区画に逃げ込んだようだな」

岩場が開けて、ちよつとした広場になっている場所だ。昼は岩山が日差しを遮り、夜は暖められた岩盤が気温を保つため、砂漠地帯ほどの防寒は必要ない。比較的戦いやすい場所に逃げ込んでくれた。だが、この場所は多くの大型モンスターが休息場所に利用している

場所でもある。

「急がなくてな……」

ただ、相棒にその気はないらしい。

軽やかな鼻歌が聞こえる。

その主は赤いメイド服にエプロンを身につけた少女だった。楽しいで、好きな料理でもしているかのようだが、その手には肉厚のナイフが握られていた。肉どころか、骨も両断できる鋭利なものだ。

「ナイフをさつくり入れましょう」

アマランサスはそんなかけ声で、振りあげたナイフを切り落とされた尻尾に突き刺す。ナイフはうまく甲殻と鱗の間に差し込まれた。慣れた手つきで、甲殻を肉から剥がしていく。

態度や服装はともかく、手並みはすでに熟練のハンターの域に達している。

だが、今回の目的は火竜の延髄だと聞かされている。希少な素材で、剥ぎ取りの技術が発達するまでは入手することさえできなかったものだ。桜火竜からは比較的是ぎ取りやすいという話も聞いているが、それでも一〇回に一度はぎ取れるかどうかの確率だろう。

お手並みを拝見することにしよう。

アマランサスはポーチから小瓶を取り出した。深緑色をした粘液が封入されている。ナイフでいれた傷口から、ゆっくりと流し込ん

でいく。

火竜の延髄がはぎ取れなかった理由は、延髄が空気に触れると、発火してしまうほど過敏な性質にある。勝手に燃焼して、燃え尽きてしまうのだ。この問題を解消するために開発されたのがこの粘液だった。粘液で包んでしまうことで空気と遮断するのである。この技術で確かに延髄を剥ぎ取ることにはできる。しかし解体の時に少しでも空気が紛れ込めば延髄は燃え尽きてしまう。諦めて甲殻を拾って帰ることになるのだ。

火を噴き出して当たり前なのだが、アマランススは確実に傷口を広げ、延髄を粘液に浸していく。見る間に延髄が粘液に包まれ、尻尾から切り離された。素早く空気を通さない袋に詰め込んで、剥ぎ取りは成功した。

「上手に剥げました〜！」

無邪気にアマランススは喜んでいる。

付き合いが短いため、アマランススが本当に喜んでいるのか、笑顔をつくっているだけなのか、判別がつかない。演じている理由はないはずだが、しかしこんな人格の人間が本当にいるのだろうか。

こちらの気持ちを知らないで、アマランススはかわいらしい笑顔で手を高く振っていた。

手招きされている方向は、テイルテュが教えるまでもなく、桜火竜のいる九番区画の岩場の方向であった。

九番区画は広すぎず狭すぎず、飛竜さんにとってはお昼寝したくなるような場所なのでしょう。

でも、今日はせっかくの夜会。ダンス・パーティを一人抜け出して、寝息をたてるなんてあんまりです。ティルテュと一緒に九番区画についた頃には、桜火竜さんは体を丸めて寝ていました。

「おしおき、しちゃいましょ」

起こさないよう小声です。せっかく気持ちよさそうに寝ているんですもの、驚かすときはパーツとしたいですよ。

「ティルテュ、早く、早く」

荷車を引いているティルテュに、やっぱり小声で呼びかけます。

荷物は大きな赤いタルが2つ。とっても大きな花火のあがる、アマランサスのとっておきです。

大タル爆弾。

なんの変哲もない大きなタルに、煎じると少しの刺激で火を噴く火薬草と、熱を加えると爆発するニトロダケをたくさん詰め込みました。甲殻の強度なんて考えないで、強い衝撃を与えることができる、ハンターの最終兵器なんですよ。

でも、その分重くて、持っていたら手が痺れちゃいます。だから置いておきました。桜火竜さんがパーティから抜け出しても、ここできり直しができますように。

「アマランサス、ここでいいのか？」

テイルテュが大タル爆弾をリオレイア亜種の頭のすぐ近くに置きました。さすがハンマー使いのお姉さんです。とても素早くて助かります。

それじゃあ次は私の番。

ヘビィバスタークラブを背中から右手に持ちかえて、折り畳まれていた銃身をまっすぐにします。弾は、通常弾に決まりです。

これといって特徴がない代わりに、一度の狩りにたくさん持ち込めるかわいい子です。スコープを覗いて狙いを構えます。大タル爆弾を狙いましょう。通常弾が発射されて、薬莢のカラーの実が割れながら銃身から排出されます。弾はそのまま突き進んで、タルに丸い穴をあけました。

きつと中では固いハリの実でできた弾頭が火薬草さんと熱いステップを踏んで、ニトロダケさんを嫉妬させます。大タル爆弾が、まっず一つ爆発して、仲良しのもう一つの大タル爆弾さんが誘爆します。真っ赤な火柱が二つ立ち上って、すぐに消えてしまいます。でも花火って、すぐに消えるから綺麗だと思いませんか。

そう思いませんか、桜火竜さん。

桜火竜さんは顔を真っ黒にしてとても苦しそう。きつと、すぐに消えてしまった花火が残念で仕方ないからですよね。

でも、今はテイルテュの相手をしてくださいな。

ティルテュはハンマーを構えて、もう桜火竜さんの前まで行っています。とても力強く大地を踏み締めて、ハンマーを両手でしっかりと握って、駒みたいに回り始めました。

一回、二回と回る度に黒狼鳥さんの鋭い嘴をそのまま使った鋭利なハンマーが雌火竜さんの頭を叩きます。三回、四回、五回と続いた頃でした。

ティルテュはその回転と遠心力をそのままハンマーに乗せて、大きく振り上げました。雌火竜さんの下顎を直撃すると、その頭はともとても高く浮き上がりました。

リオレイア亜種の傷だらけの頭が一定の高さで静止したかと思うと、次は落下します。砂漠地帯とは違う、固い岩盤にぶつかり、もう二度と、桜火竜さんは起き上がってきませんでした。

ティルテュがハンマーを地面に突き立てて、柄の上に手を置きまします。ハンマー使い本来の動作にないこれは、ティルテュなりの勝利のポーズなのでしょう。

アマランサスは拍手で、その勝利を祝福しました。

スイ「狼」。

ある目的のために作った新品同然のハンマーではあったが、思いの外、腕になじむ。

上位の素材を用いた装備を使用し、慣れた相手だったとはいえ、ここまで順調に狩りが進んだことは珍しい。その格好は理解できないがアマランサスの腕はたしかかなものであるようだ。

当のアマランサスははぎ取りに入っていた。例のナイフで、今度裂いているのは喉元から首にかけて。どうやら火竜の火球を生み出す器官、火炎袋を狙っているのだろう。

延髄ほどではないが、剥ぎ取りにくい素材だ。

火竜は低温で発火する液体をこの複数ある火炎袋内に貯めている。常温で発熱するほど物騒なものではないが、袋自体は大変脆く、ナイフで少しでも袋本体を傷つけてしまえば剥ぎ取りは失敗になる。

さすがのアマランサスも二個をはぎ取ることが限界だったらしい。三個目は袋を破いてしまったらしく、ナイフに赤黒い液体がついていた。アマランサスのはぎ取りは結果として、火炎袋2つに、上位種の強固な甲殻、桜火竜の堅殻一つになった。

「テイルテュの番ですよ」

剥ぎ取りを終えたアマランサスはすでに帰りの準備を開始している。

テイルテュは特に雌火竜亜種の素材を必要とはしていなかったが、モンスターを倒した以上、はぎ取りを行い、その素材を生かすことは礼儀だろう。解体用ナイフを取り出し、甲殻の隙間に差し込む。

モンスターハンターの規則では、大型モンスターはぎ取り回数は一人原則三回と決まっている。モンスターを根こそぎ奪っていいわ

けではない。

肉食のモンスターは殺して肉を喰らうように、ハンターは殺して素材を剥ぐ。どちらにしる、残された肉はより低次の捕食者の食料となり、骨と皮だけになっても肉食性の鳥がその死体をついばむ。そしてその骨でさえ、小動物が巣作りに利用する。

生命のサイクル。ハンターは無粋な侵入者ではなく、自然の一員ではないのである。

三度剥ぎ終えて、ティルテュは堅殻を三つ。この素材を利用した防具を作ってもいいし、亜種の素材は高値で取引されるから売りさばいてもいい。

だが、こんなものよりも大きな収入はすでにあつた。それは、繁殖期夜の砂漠を肌で感じられたこと。これ自体が大きな利益となつた。

迎への気球に乗り込みました。

四人が乗ることができる位の気球には、操舵士としてかわいい猫さんが乗っています。黄色い体毛のところどころ黒い筋が入って、虎の子どもみたい。

つい抱きしめたくなくなりますけど、以前そうして墜落しかけたことがありますから、我慢、我慢。

猫さんは後ろ足で立って、器用な前足で敬礼します。

「お疲れさまですニヤ。お迎えにあがりましたニヤ」。

獣人種に分類されるアイルーっていうモンスターですけど、姿がとても猫に似ていて、人語を解するくらい頭がいいんですよ。中にはこうして言葉を覚えて人の社会で生活している子もいる、とても親しみやすいモンスターさんです。

いつまで眺めても飽きません。でも、アイルーさんたちって、眺めていると次第に落ち着かなくなつて、そわそわします。片時も目を離しませんから、様子の変化がよくわかるんです。

今回も同じです。まるで見えない気配に怯えているように視線が定まりません。操舵のために前を向いたかと思うと、すぐアマランサスの方を向いて、すぐに視線を前に戻すの繰り返しです。

アマランサスの後ろに何かあるのでしょうか。

振り向くと、兜を脱いであきれた顔のティルテュがすぐ後ろにいました。

「少しは視線を逸らしてやれ。それでは操舵に集中できない」

無理に体の向きを変えられてしまいました。でも、そうすると不思議にアイルーさんは落ち着きを取り戻したようです。

「君は、ハンターとしては優秀なんだがな……」

誉められちゃいました。

「アマランサスは優秀なメイドさんなんですよ。狩りくらいできないと」

「そのことなんだが、どうしてそんな装備をする？」

かわいいメイドさんだからです。こう答えると、答えになっていないと叱られてしまいました。ひどいですよね。

だからアマランサスも聞き返しちやいます。ちょっと大切な話です。だから、少し目をしっかりと見開いて。

「では、ティルテュがその装備を選ぶ理由はどうしてですか？」

アマランサスは笑顔をうつすらとしたものに変えると、その青い瞳でこちらをまっすぐに見てきた。いつもの笑顔以外で初めて見る表情はこちらの内面を見透かすような澄んだ色の瞳をまざまざと見せつけてくる。

「冗談じみた空気を演出するため。それに、アマランサスから目をそらすために、大げさに首を回してみせる。」

武器が振りやすい。力を加えやすい。加えて突発的な音をシャットアウトする機構が備えられた防具は、一般的なものだ。メイド服ほどの珍しいものではない。そう、笑うことでごまかしながら返すと、アマランサスは元通りの笑顔に戻った。

「そんなに珍しいですか？ それならティルテュも……」

言葉が終わる前に、掌を勢いよく突き出す。

「断じて断る！」

さほど残念そうではない笑顔で、アマランサスはさも残念そうな声を出した。

「え〜」

一体どのような育ち方をすればこのような性格になるのかまるでわからない。何度考えたところでわかる気がしない。

当のアマランサスはもうティルテユへの関心をなくしてしまったように、またアイルーを眺めては哀れな獣人を落ち着かなくさせていた。気球の運行に差し障りがでないといいが。

心配した通り、気球が大きく揺れた。いや、揺れてはいない。あまりに大きな音がして、そうと錯覚しただけで。

何事かと、気球の縁に身を乗り出す。

気球はすでにセクメーア砂漠を抜け、山岳地帯に入っていた。眼下には岩山が続き、ドンドルマの街に通じているような谷が幾筋も走っている。

どうやら、谷の一部が崩落したらしい。その音に驚かされたのだ。

「人騒がせな……」

そう、気球の中へと戻ろうとした。身を引いている途中で、アマ

ランススが双眼鏡をのぞき込んでいることに気づいた。

ずいぶんと準備がいいものだ。

だが、そうまでして見るものがあるのだろうか。もう一度、谷に目を戻す。すると、岩山が動いた。

違う。

岩山としか思えないほど巨大な何かが歩いてきたのだ。

「貸してくれ」

ひったくるように双眼鏡を借りた。

拡大される視界の先に見えたのは巨大な竜の頭だった。頭だけで飛竜以上の大きさがある。これで全身ともなると、街と同規模の大きさになるのではないだろうか。しかし、なにかおかしい。

その頭からは何というか、生気が感じられない。鼻先の角は天を突かんばかりの大きさだが、まるでむき出しの骨のように見える。眼孔には目玉のようなものはなく、窪みとなっているだけではないだろうか。

「何だ、あれは……？」

よく見ると、首には肩から下がなく、頭のすぐ下から四本の細い脚が生えていた。脚は細く長く、とても竜のようには見えない。色はくすんだ光沢をもつ灰色。すべての脚に節が見受けられる。これらの特徴を鑑みると、答えはごく近くにある気がする。

気球の中に視線を戻すと、丁寧に置かれたヘイバスタークラブが、甲殻種の素材を用いたヘイボウガンが見えた。その光沢とよく似ている。

では、奴は甲殻種なのだろうか。

もう一度双眼鏡をのぞき込む。

角度が悪くてよく見えない。

「右だ。もっと右に寄せろ！」

景気のいいかけ声で、アイルーが舵をきる。気球がゆつくりとした動きで、巨大な何かを後ろから見下ろせる位置にまで来る。

それはようやく正体を表した。

胴体から一对の短い触覚が伸び、先端に眼球がある。ただ光景を移すためだけのそれは人のそれほど感情豊かものではなく、無機質な表情をたたえていた。

先に鋏が備えられた第五、第六の脚が折りたたまれて、その無感情な顔の前にある。

もはや間違いなく、奴は甲殻種。それも、規格外の大きさを持つ甲殻種に違いない。

とほうもない大きさの蟹がさらに途方もない大きさをした竜の頭殻をヤド代わりに背負っているのだ。そんな化け物が後ろ向きに歩

いていたため、ティルテュは竜が歩いているのだと錯覚したのである。

ほとんど、この世界は果てしない。

あの頭殻の持ち主が健在なら、それこそ街と並ぶ大きさだろう。だがこのお化け蟹でも、街を襲えば想像さえ恐ろしい被害が出る。

「何者だ……、あの蟹は……？」。

答えを期待していたわけではなかった。しかし、意外なところから返事があった。

「シエンガオレン。ギルドが災害にも匹敵する存在として観測を続けてる甲殻種ですよ」。

さも、今日のデザートに使われている食材でも紹介しているかのような。そんな調子でアマランサスが答えた。

第三話「紅衣の女中と始まりの足音」(後書き)

* 注意

上位桜火竜から火炎袋は剥げません……。

九番で、リオレイアって寝ましたっけ……？

このように、お話の都合に合わせて、ちよくちよく捏造が行われます。ご注意ください。

……ゲームの雰囲気を壊さないよう、お話を作っていくことと決めていたのに……。

第四話「紅衣の女中と聖堂の騎士団」(前書き)

古龍の設定は、完全な独自解釈です。稀少で規格外の存在がその辺をつろちよろしいとはいはずがないと考えて、このようにしました。

そのため、この小説に麒麟装備の女性ハンターはいません。

第四話「紅衣の女中と聖堂の騎士団」

古龍種。

ハンター・ギルドは存在を否定しながらも、ハンターたちの間で噂が絶えたことのないモンスター種のことである。

それがどのようなものであるか、明らかかな話はない。

ある者は火を操る怪物で、滅亡した古代文明に崇拝されていた何かだという。

またある者は嵐を使役し、天候さえ自由にする悪魔のような何かだという。

ほかにも不可視の体をもつ、恐ろしい何かであるという者もいる。

共通していることは、それが何かはわからないが、ただただ恐るべき力を有した存在であるということ。

人は木々を切り倒し、モンスターを追い立てることで自然に打ち勝ってきた。だが、雄大な山々を征服できたか。子どもの頃、夜の森に感じた不気味さは本当に消え去ったのか。

食物連鎖の頂点に立つ人が、それでもなお捨てることのできない自然への憧憬と畏怖。古龍とは、人のもつそんな始源への恐怖の象徴だった。

どれほど山を上り詰めてもその先にはいくつもの山並みが連なっ

ている。どれほど切り開いても森の果ては見えない。自然の征服者である人が、それでも及びもつかない存在が、まだどこかに隠れているのではないか。

どこかの山で、その雄叫びを木霊させながら。

あるいは、森の奥深くで息を潜めて。

彼らはいつの日か立ちふさがるのかもしれない。かつて大海が大きな壁として存在したように。寒さが歩く脚をすくませたように。モンスターが自然の猛威そのものであったように。

人が征服者たる資格があるかを確かめるために。古龍とは、人に科せられた試練そのものであるのかもしれない。

シエンガオレンは古龍ではない。

甲殻種である。ギルドが正式発表を行い、新種の甲殻として瞬間に広まった。これは発表に含まれていないが、ギルドではその拳動を一〇年以上前から観測していたらしい。観察ではなく、観測である。岩山が動いているかのような存在は、生物とするよりも、自然災害と等価であると認定されたのである。

シエンガオレンは、ドンドルマの街ができる以前からこの山岳地帯を回遊していたらしい。

途方もない時間をかけて、途方もないルートを歩く。そこに何かあるのか構いもしない。砕けた岩の砂利道であるごとく、人々の営み

がある街であろうとも。

ギルドがシエンガオレンの動向を監視していたのはそのためである。いつかドンドルマの街をそのルートに選択するかもしれないことが予見されていたからである。

その予想は残念なことに外れていた。

いつかではなく間もなく。かもではなく確実に。

シエンガオレンはドンドルマの街を襲うのである。

アマランサス、テイルテュが目撃した谷の崩落。それは地震による偶然のものであった。それがシエンガオレンのルートを変え、侵攻を一〇年単位で早めたのである。

なんとも不幸な話だった。

この地方は地震が少ない。滅多に起きないはずのことが偶然の不幸を招いた。

シエンガオレンが街を、文字通りに踏みにじるまで、一週間という時間しか残されていなかった。

ドンドルマの街は騒然としていた。ハンターたちはそれぞれのやり方で狩りの準備をしていた。資料を漁り、少しでもシエンガオレンについて知ろうとする者たちがいる。この街には図書館にあたる施設はない。そのため、余裕のある者は本を買う。そうでない者は

所有する者のマイハウスに押し掛ける。あるいは道ばたで一冊の本を囲んでいた。

堅い甲殻を砕こうと、武器を鍛える者たちがいる。

どんな攻撃にも耐えられるよう、防具を鍛える者たちがいる。

彼らはどちらも、武器工房に押し掛け長い列を作っていた。職人が炉にこれでもかと火を灯し、炎が音を立てて燃えている。

わずか一週間。そんな短い時間を、ハンターは余すことなく、迎撃のために使用しようとしていた。

ハンター街はこれまでにないにぎわいを見せていた。

だが、猛る捕食者だけで自然は構成されてはいない。これと同じように、ドンドルマの街もハンターたちばかりがいるわけではない。

一般市民。ハンターに直接関わるわけではない人々は家から出てこないよう、伝達されていた。一般市民が多い市街地では、人通りがなく閑散としていた。

そして、街のもう一つの顔。

シエンガオレンが訪れる方角を向いた城壁では迎撃体制が整おうとしていた。

大きく曲がった谷に沿って、各種迎撃装備が配置されていた。

第一区画。

岩場を切り崩して監視塔の役割をする高台が築かれている。一週間後、この高台の前をシエンガオレンが通過すると、戦いが始まる。

第二区画。

急な角度で折り曲がる道が、シエンガオレンの足を止める。谷の兩岸には岩を落とす人員が配置される。道の途中に高架の通路が備えられている。シエンガオレンを見下ろして、ガンナーが並ぶことだろう。

第三区画。

特徴のない一直線の道である。木でできた塀が組み立てられているが、それが時間稼ぎにもならないであろうことは誰もが理解していた。

第四区画。

第二区画と同様の構造をして、再度迎撃のチャンスが与えられる。

そして、最後の第五区画。

ここではギルドの、ドンドルマの街の最終兵器がその出番を今や遅しと待っていた。

武具工房では禿頭の親方が汗を拭うまもなく注文の整理に当たっていた。

残された時間は決して多くない。あまりに複雑な工程を必要とするものは断ることもあった。同じパーツを使うものは多少順番を前後させ、効率のよい作業を心がけていた。

街中のハンターが訪れたのではないか。それほど多くの人をさばいた。その苦勞もあって、一週間の計画をまとめることができた。

すでに完成した武器が工房の一画には並んでいる。

フルフルなどのモンスターが発電に用いる器官、電気袋をその刀身に埋めた大剣。頑強な岩竜バサルモスの甲殻で固めたハンマー。どれも主の出迎えと、そして何より振るわれることを今や遅しと待ちかまえている。

弾ける火と、鎚を振り下ろす屈強な男たちの汗が混じり合った熱気をかいくぐり、ハンターが一人訪れた。

カウンターの前に立ったその男は、全身を蒼火竜リオレウス亜種の装備で包んでいた。原種の深い赤が、亜種特有のくすんだ蒼に変わったところで、その力強さは損なわれることはない。その戦うことに秀でた姿は、ハンターと言うよりも、戦士や騎士のような戦いそのものを生業にする者のように思えた。

「アレスだ。武器を受け取りに来た」

そう名乗った男は、脱いだ兜をカウンターにおいた。木製のカウンターが軋み、その重さを誇示していた。何とも眼光の鋭い男だ。

街中だというのに、その緊張感は微塵も解かれてはいない。この男なら夢の中でも狩りにでているのでないだろうか。そう誰かが言い出した。

夢狩り人アレス

この男の通り名は、その絶え間ざる闘争心に由来していると聞く。

まだ若い。しかし、首の後ろで束ねられた髪はすでに白く染まっていた。額から右目にかけて傷跡はちよつとやそつとのことのできるものではない。

その過去が尋常ならざるものだと、想像することは難くない。

親方はカウンターの脇に置かれたランスを持ち上げた。

ホウテンゲキ「狼」。

黒狼鳥イヤンガルガの禍々しいまでに鋭利な尻尾を惜しむことなく用いたランスだ。尻尾の棘が含んでいる猛毒の再現こそ成功していないが、ドラグライト鉱石によって固められた棘はその鋭さを微塵も損なっていない。盾には傷つくたび強固に再生すると噂される黒狼鳥の象徴ともいえる耳が用いられている。

黒狼鳥は決して群れることのない孤高の存在である。それはまさにアレスの生き様そのものだと言えた。

アレスはまず盾を手を取った。人の胴体ほどもある大きさの盾を右手に馴染ませた。続いて左手にランスを構えた。

ハンターの用いるランスは、そう上品な大きさをしていない。飛竜種の固い甲殻を貫くためには長く鋭く。魚竜種の巨大な体躯に折られないためには太くたくましく。

結果、ランスは一見、人の手に余ると思えるほどの大きさとなる。

ハンターとはそれを片手だけで扱う人種であった。

アレスがほんの一步踏み出す。合わせてランスが斜め上へと突き出された。

音がした。鋭い。しかし力強い。突き刺された虚空の一点。そこを悠々と漂っていた大気が一斉に外側へと押し出され、工房中を撫でた。

この一時だけだった。目まぐるしく働く男どもが手を止め、同じものに目をやったのは。

「さすがだな。いい出来だ」

そう言うと、アレスはランスを背中に担いだ。何とも絵になる男だ。ハンターなどではなく、どこぞの騎士でもしていた方が似合いそうなものだ。

そう言えば、この男の噂話の一つに、かつて騎士をしていたというものがあつた。あくまで噂だが、姫君と恋に落ち、二人の関係を重くみた国王から追放されたのだそうだ。右目の傷も、その時につけられたものだとされている。

この真相はわからない。この寡黙な男がわざわざ昔話をする

も思えない。

アレスはぶっつきらぼくに袋を投げ渡してきた。

「約束の金だ。確認してくれ」

袋の金に間違いはなかった。

「たしかに、毎度あり！」

そう、無言のアレスの背中を見送った。

「人様の過去なんざ関係ないか」

過去の失態だろうが、現在の無様だろうが、将来の見込みなど関係ない。ただ、素材と金さえ用意すれば望みの武器を仕上げる。

それが武具工房なのだ。

そして、また一人の猛者が工房を訪れた。立ち去ろうとするアレスと視線を交じらせて、二人はほんの一時だけ顔を向き合わせた。

それからすぐにアレスは工房を出て、入れ替わってその人物が力ウンターの前に姿を見せた。

それは女だった。赤いメイド服を着て、笑顔が妙に明るい。初めて訪れた時にはハンターだと気づかなかった。話に聞いたことは狩り場においても同じような調子であるらしい。

街の空気を狩り場に持ち出すこのアマランサスと、狩り場の張り

つめた空気を街にまで持ち込むアレス。何とも好対称の二人が入れ替わったものだ。

アマランサスが軽やかに手を振ってくる。女性ハンターも少ないこの街で、こんなことをするハンターは、彼女くらいなものだ。

「こんにちは、おじさま」

もちろん、親方をおじさまなどと呼ぶのも彼女に限られる。

以前はどこぞの王宮でメイドとして働いていたという噂もないではない。だが、そんなことを信じるものはまずいない。特に、同じ狩りに出た者は口をそろえて否定する。あの女がメイドをしていたはずがない。あんなことができるメイドがいるはずがないと。

「注文していた武器、できました？」

並べられていた武器の中から、ヘビィボウガンを取り上げ、カウンターに置く。カウンターが哀れなくらいに軋む。

火砲「狼」。

黒狼鳥イヤンガルルガの黒みを帯びた紫の甲殻が、鋭利な棘を残したままでフレイムを覆っている。烏竜種随一の強度で知られる黒狼鳥の甲殻を使用した、いや、このヘビィボウガンはこの素材を使わなくてはならないのもである。

瞬発的に膨大な熱量を発生する火竜の延髄がいくつも仕込まれている。それがやっつきょうの点火とともに銃身内の空気を順次膨張させる。多連薬室と呼ばれるシステムが発生させる圧力に耐えうる素

材は限られる。

さらに複雑なシステムが災いし、使用できる弾も限られる。こんな物騒なヘビィボウガンを扱いたがるハンターが、ただのメイドなどであるものか。

もっとも、アマランサスの様子はすてきなポーチでも見つけてはしゃいでいるかのようだが。

「すてきです！　ありがとうございます、おじさま！」

両手を胸の前で合わせてはしゃぐアマランサス。まったく、ほかのハンターどもが見せない笑顔をするものだ。

照れ隠しの意味もかねて、弾をぶつきらばうに投げ渡した。試射用の空薬莖だ。

アマランサスは弾を受け取ると、火砲「狼」を腰だめに構えた。弾を銃身に放り込むと、装填レバーを引く。弾丸が銃身に収まった力強い音がした。

狙う。

アマランサスが行うこの動作は、動作といえないほど静かで、不動。端からの干渉を一切許さず、ただアマランサスの中だけで完成する儀式。

その様子を眺めていて、アマランサスがどこを狙っているのか、わかるはずもない。

笑顔がやんでいた。目が見開かれ、アマランサスの青い瞳が世界を映す。

その瞬間、引き金が引かれた。

撃鉄の音。息つくまもなく四連続する空気の膨張音。弾丸は飛び出ない。だが、弾が壁に掛けられた盾を一直線に狙いすましていることがわかる。

この狙撃に気づいたものは誰もいなかった。

アレスとは、本当に対照的である。

同じ、ただ一点に力を集中し、狙い撃つことは同じなのだ。だが、その力の波紋はまるで違う。

アレスの突きは、百花繚乱と咲き乱れる花束。アマランサスの射撃は一輪の花。それがどれだけ人目を引くかは異なるが、そのどちらが美しいかなど、論じるだけ無粋というものだ。

アマランサスはヘビィボウガンを背中に担いだ。その顔には笑顔が戻っていた。

アマランサスは、お世話になっている獵団のテントを訪ねました。広場にいくつも並んでいるテントの一つです。

獵団の名前は「聖堂騎士団」。

かつこいい名前でしょ。聖堂なんて入ったことありませんけど。団長が気分と語呂で決めたそうです。バリバリ名前負けしてます。

テントの中にはテーブルがいくつも並んでいます。ほぼ中央のテーブルについているの女性が団長です。

まだ防具を決め切れていないのでしょうか。インナーだけで裸同然の格好でした。まだ日が高いのに、お酒まで飲んでいるみたいです。

「こんにちは、団長」

挨拶すると、お酒臭い息で返事がありました。

「よう、アマランサス。シエンガオレンが来てるんだってな、準備はいいか？」

団長のように火山に行くのに体を温めるホット・ドリンクを持って行ったりしません。そう言うと、団長が無言でテーブルの上においてあった石ころを投げつけてきました。

もちろんかわします。

とりあえず、攻撃したことで満足したんでしょう。団長はテーブルの上にだらしなく伸びて、アマランサスを見上げてました。

「それで、おまえは誰と組む？ エールのパーティがあいてるみたいだぞ」。

エールとは副団長さんのことです。太刀を好んで使う、とてもしつかりした人なんですよ。今は忙しいみたいで、このテントにはい

ないみたいです。まあ、のんびりお酒飲んでる人なんて、団長くらいですけど。

でも、今は団長に用がありますから好都合です。

「私、迎撃戦に参加しません。私を除いて組んでください、団長」。

この言葉は、さすがの団長も驚いたようです。勢いよく立ち上がりました。

「お前、この街の危機なんだぞ！」。

団長はすごい剣幕です。そんなに言うならお酒なんて飲まなければいいのに。

それに、私の決心は変わりません。

「見つけました。とても、メイド服が似合いそうな人ですよ」

団長は急にあきれた顔で、椅子に座りなおしました。

「またか……。わかった、行ってこい。街の方はなんとかしておく」

ありがとうございます、団長。

クエスト受付所。この街ほどの大規模になると、膨大な数の依頼が舞い込むことになる。それらはギルドが一括管理する。

その難易度で独自に査定。その後、ギルドの認定を受けたハンターを募る形式になっている。

現在募集されているクエストは、受付所の掲示板に張り出される。そのため、普段、受付所はハンターたちの姿が絶えることがない。

しかし、シエンガオレンの侵攻を控えた現在は、受付所は閑散としていた。掲示板に張られたクエスト自体数が少なく、風に寂しく揺れていた。受付嬢が暇そうに持ち場についている。

ティルテュは苦虫を噛みつぶしたような顔をして、一人で掲示板の前に立っていた。数少ないクエスト情報の中から、目的のものを見つけたことであろうやく、安堵のため息をついた。

クエストの内容が書かれた紙を掲示板から引つたくと、最寄りの受付嬢のいるカウンターへと叩きつけた。

「このクエストの受注を頼む」

緑色の制服を来た受付嬢は目を大きくしていた。カウンターを強く叩きすぎたからではない。こんなときに大恩ある街を見捨ててクエストに出ようとするうつけ者がいること自体に驚いているのだから。

クエストの名前は、「死神」。

繁殖期に決まって現れる2頭の角竜ディアブロス亜種を同時に狩猟するクエストである。

「一人で角竜は無謀です！ それに、今行かなくても、また来期を

待てば、いえ、待った方が賢明です！」

末端とはいえ、ギルドの一員はさすがと言うほかない。知識が豊富で、判断も適切だった。

シエンガオレンが来ている今、縁起でもないことを言うなら、クエストが成功したとしても、帰ってきたら街がなくなっていたということも考えられる。それならば、街に残りシエンガオレンを撃退した上で、また訪れる繁殖期に仲間を募って挑んだ方がどれだけ現実的であろうか。

だが、ティルテュには今行かなくてはならない理由があるのだ。

カウンターにおかれた紙片を強く叩く。

「私は理解している。街を見捨てて逃げ出す臆病者がここにいることはな！だが、臆病者にも譲れないものがある！」

ずいぶんときつい口調で言っただつもりだった。だが、受付嬢は冷静にティルテュの様子を観察していた。

にらみ合いが数瞬続いただろうか。

受付嬢がクエスト受諾の書類を取り出しながら言った。

「あなたはギルド所属のハンターであり、このクエストの受諾は認められています。私が拒むことのできる論拠はありません」

書類をティルテュへと差しだし、受付嬢は筆記具が手に届くところにおいた。ティルテュがその筆記具を手にしたところで、受付嬢

は最後の確認を行った。

「本当に、よろしいのですか？」

ティルテュは無言のまま、書類を書き上げた。受付嬢からクエストを受けた証を受け取ると、受付所を後にする。

だから、ティルテュは気づくことがなかった。決まりに反しないからティルテュにクエストを許可した受付嬢が、決まりだからと随行するハンターを募集する半券を掲示板に張り出したことを。

第四話「紅衣の女中と聖堂の騎士団」(後書き)

多連薬室については、ゴルゴ13文庫版104巻「アム・シヤラの砲身」をご参照ください。もっとも、この設定が今後登場することは無いと思いますけど。

余談ですが、桜火竜はやっぱり九番区画で寝ました。

第五話「紅衣の女中と脅威の仙高人」(前書き)

シエンガオレンはゲーム内よりも当社比一〇割り増しの性能でお送りします。

第五話「紅衣の女中と脅威の仙高人」

交易場。ドンドルマの街からいくつも伸びた街道には、その中継地点としていくつかの集落が設けられている。ここ、レン高原は、その中でももつとも美しいと評する者がいるほどの名所である。

なだらかに続く平原から、左右を切り立った岩山に囲まれた緩やかな登り斜面にかけてがレン高原である。この斜面の奥では岩山が途切れており、そこからドンドルマの街へとつながる谷へと入ることがができる。

そのため、ドンドルマを行き来する行商人、あるいはハンターを志す若者がこの高原に立ち寄るのである。

平原には小さな家が点在し、放牧された草食種アプトノスがのんびりと草をはむ。

斜面を石で舗装された道が縦断し、道の両脇には宿屋と馬車アプトノスを休ませる宿舎の姿がある。

どの建造物も石造りの小さなものだった。時は繁殖期。寒冷期では雪が降ることもあるレン高原ではあっても、暖かな日差しの中、退屈そうな煙突が屋根から青い空を見上げていた。

ドンドルマへと通じる道は他にもある。しかし、行商人の中には遠回りをしてでもレン高原を訪れる者は少なくない。

ここはそんな、牧歌的で、どこか懐かしい場所だった。

ここでなら、一つのなぞなぞを作ることができることだろう。

煙突みたいに太くて、岩山よりも大きくて、空よりも高いものな
あんだ？

甲殻種シエンガオレンとその脚である。

歩く岩山が、レン高原を蹂躪していた。シエンガレンが背負う、
巨大な頭殻から伸びる角は天を刺し貫きながら大気を斬り裂いた。
後ろ向きのまま、頭殻を前にしてシエンガオレンが進む度、突風が
生じた。

空から丸太が落ちてきた。シエンガオレンの脚である。高いところ
に持ち上げられた脚が勢いよく踏み落とされた。

家が煙突を割られ、天井を貫かれ、壁の石材を内側から弾きとば
された。上がった土煙の中から、踏みつぶされた木が軋んだ、悲鳴
にも聞こえる音が聞こえる。脚が刻んだクレーターに、残骸が散在
していた。

レン高原に音楽が響いた。

破壊された家を叩く鎮魂歌ではない。戦いの始まりを告げる行進
曲。戦意を高揚させる心音に似た破裂音を奏でる鬼人笛の音色が重
なり合い、一つの楽曲にも似た音を響かせていた。

続いて巻き起こる鬨の声。

斜面に弓を構えたハンターたちが並んだ。

ハンターは狩人であり、軍隊ではない。迫りくるシエンガオレンが射程に入ったと判断したハンターたちは各々のタイミングで矢を放った。一斉攻撃というものはなかった。それではまばらに矢が降り注ぐばかりで、シエンガオレンの甲殻も、殻代わりの頭殻も傷つけることはできない。

矢尻と甲殻。堅いもの同士がぶつかり合った甲高い音がした。

振りあげられた脚がたたき落とされる。すると、ハンターたちが蜘蛛の子を散らしたように逃げ出した。

シエンガオレンにとって攻撃ではなく、ただ歩いただけでも人にとっては十分な脅威となる。蚊が騒いでいるようにも感じていないことだろう。

しかし、ハンターは諦めない。

その動機は人によって異なる。富や名声。でなければ大切な人やものを守るため。あるいは単に回りの人が戦っているからであるかもしれない。

外聞こそ異なるが、どれも結果は相違ない。

誰もがドンドルマの街を守る。そのためにあまりに巨大な暴威へと挑みかかっているのだから。

ハンターたちは狩りに出るときは原則四人以下で行動する。本来なら大人数で出向いた方がより確実なことはいうまでもない。だが、ギルドは一部例外を除いて五人以上のクエスト参加は容認していない。

理由は諸説分かれている。

生態系を不必要に荒らしてしまわないためだとも言われている。単に実務的な慣例にすぎないのだと。

同時に伝説があった。ハンターという職業を切り開いた一つの話がある。

まだハンターがいなかった頃、モンスターは嵐や地震、豪雨と言ったような自然の暴威の一つにすぎなかった。そんな時、人と比べあまりに巨大なモンスターに挑もうとした者たちがいた。彼らの装備はあまりに貧弱だった。人が人を傷つけるために作った武器をそのまま持ち込んだところで、モンスターの鱗も甲殻も砕けはしない。

より巨大で強力で、重たい一撃を浴びせられる武器が開発されるのは、彼らによってモンスターを狩ることができるのだと証明されてからの話である。

彼らの前に道はなく、彼らこそが道であった。

満足なアイテムもない。モンスターの生態さえ、わからぬことが多い。

それでも彼らは五人でパーティを組み、幾多のモンスターを狩っ

てきた。

そして、悲劇は唐突に訪れる。

一角竜モノブロス。

決まった縄張りを持たず、定期的な移動を繰り返す砂漠の飛竜種である。

その名の由来である深紅の角は砂に汚れながらも鋭く長い。角竜に共通する強靱な四肢に、退化し満足な飛行を行わなくなった翼は大地を掘り進む。

まさに嵐であった。

人の集う場所近くに現れた場合、人々はその脅威に怯えながらもただ耐え、通り過ぎることを待つことしかできない。そんな暴風に挑もうとしたのが彼らだった。

その戦いは熾烈を極めたとされる。

モノブロスにとっても初めてのことだっただろう。自分に向かい来る人とちぼっけな存在と対峙したは。

彼らもそれは同じだった。本当にこんな化け物に勝てるのだろうか。こんな思いが足をすくませることもあっただろう。逃げ出した。こう考えないはずがなかった。それでも彼らは戦い、戦い抜いた。

角をへし折られた一角竜は、しかし逃げだそうとはしなかった。

その命のすべてを、あまりにちっぽけで、あまりに大きな自然への挑戦者にぶつけたのである。

断末魔の悲鳴を乾いた空に轟かせて、一角竜は敗北した。

だが、同時に彼らもまた大切な仲間を一人失っていた。

それ以来、五人は不吉として、パーティは四人までの構成になるようになった。そんなジンクスが理由である。

ただ、ギルドの公式見解では大人数で狩り場に乗り込んだ場合、生態系や環境を不必要に破壊しかねないからであるそうだ。

こんなハンターの英雄譚も、逸話の類として母が子に聞かせるおとぎ話のように扱われることもある。

しかし、彼らが後に作った村は、確かに存在し、ハンターの聖地として多くの狩人の訪問を受けている。

町外れには一振りの剣がまつられている。これは、かつての英雄がモノブ羅斯を、いや、自然を相手に果敢に戦った際、英雄の数えられぬ相棒の一人だった。

ハンターたちはこの剣に感謝と誓いをたてる。

英雄のおとぎ話に胸ときめかしてハンターを志した者も多い。ハンターがとってくるモンスターの素材に村はいつも救われる。

そして誓うのである。

狩りの成功と生還を。

狩りは必ず成功させなければならぬ。その素材を必要としている人のために失敗はできない。モンスターが人里近くに現れた場合には一刻も早く追い払う必要がある。

そして、必ず生きて帰ること。狩りの中で死んだハンターを讃える者などいない。それは準備の不足した愚か者か、でなければ自分の力量を計ることのできない未熟者。

それは、命をかけて道を切り開いてくれた英雄への、より安全性を高めようとアイテムに改良を加え武器を鍛えてきた先人への冒瀆にほかならない。

同時に、ハンターは誓いを守る限り、何度でもモンスターに挑むのである。

「脚を狙え！ どれだけ巨大であろうと、倒れぬ木などあるものか！」。

太刀を担いだ四人組のハンターが駆けだした。

この四人は普段から同じパーティを組む仲間だった。ハンターの最小単位にしてもっとも連携のとれるのがパーティである。

四人は決して違いの太刀筋を邪魔しない太刀筋でシェンガオレンの脚に取り付くと、太刀を一閃させた。生物を切っているとは思えないほど堅い手応えがした。

黒ずんだ青い甲殻に白い筋が刻まれた程度である。

シエンガオレンが戦鎚に見まがうばかりの脚を振りあげた。歩く。ただそれだけのために脚を動かすと、再び大地へと突き立てられる。

土が潰れ、土砂がレン高原のなだらかな斜面に沿って流れた。脚の直撃こそかわしたが小規模の土砂崩れに巻き込まれ、幾人ものハンターが坂を転がり落ちた。

ハンターはあくまでもハンターである。すぐさま四人一組みで体勢を組み直す。

動けない者が出たパーティは負傷者をつれてその場を離れた。すると、別のパーティがその穴を埋めるように代わりに脚に取り付く。

ハンターはハンターらしく、一つの指揮の元ではなく、それぞれのパーティがそれぞれの役割を全うすべく動いていた。

たて続く波状攻撃。ここで、シエンガオレンがようやく反応を見せた。

歩くことをやめたかと思うと、突然足踏みを始めた。歩くよりも脚の動きが早い。ハンターたちを絶え間無い振動と土砂の崩壊、そしてシエンガオレンの剛鎚そのものが襲う。

レン高原の草原は見る影もない。

潰され、弾かれ、掘り起こされた土砂が草を、花を、樹を、美しい光景も穏やかな空気ももうどこにもない。

あるとすれば、それは人々の記憶の中にだけ。

そして、シエンガオレンは記憶を守る人にさえ容赦はなかった。

足踏みをやめた。

それから人々は驚愕の光景を目の当たりにする。

シエンガオレンがゆっくりと脚を伸ばした。鋭角に曲げられていた第2関節が一斉に垂直に近い角度を取り戻していくにつれ、本体が高く高く押し上げられていく。

手など届くはずもない。ボウガンや弓でさえ疑わしい。

立ち上がったシエンガオレンを前に誰もか上を見上げ、首を痛くしてもその本体を見ることができないでいた。

離れた位置にいたガンナーがボウガンのスコープをのぞき込んだ。

拡大された視界の中で、これまで後ろ向きに歩いていたシエンガオレンがゆっくりと振り向いていく。

死せる巨竜の頭殻に成り代わり、鋏を持つ手を前面に構えた甲殻種らしい顔が現れる。

人とはまるで異なる形状をした口の上に、先端に目のついた触手が生えていた。無機質で無感情。その目は光を飲み込みながら決して逃さない色をしていた。

ガンナーは思わずスコープから目を背けた。そのため、ようやく気づくことができた。シェンガオレンが歩行を再開したのだと。

脚を折り曲げていた時とは違い、脚の動きは降り落ちるといいうより、雑払うに近い。関節が伸びきり、遊びがなくなっているため、脚が地表すれすれを擦るように前へと突き出された。

反応の遅れたハンターが突進する柱に体を見上げるほど高く遠くに飛ばされた。

立ち上がったため脚の間隔が狭まり、シェンガオレンに近づぐだけでも危険を伴う。

そして何より、遙か天空から見下ろしてくるその眼差しが、ハンターの勇気を挫いていた。

ドンドルマの街は閑散としていた。無理もない。一般市民は家から出てくることはないし、ハンターの何割かは先駆隊としてレン高原に向かった。

何より、こんな時にクエスト出発用の馬車に用がある者もいないだろう。停泊所は人影がまばらで、普段は目的地行きの電車を探すことさえ一苦労だが、今回は難なく見つけることができた。

一台しか止まっていなかったからである。

どうやら、こんな時にクエストに出かけようとしている物好きはティルテュだけであるらしい。

草食種アプトノスに引かれる竜車の中をのぞき込んで見ると、何も置かれていない。二、三のパーティが同席する時は荷崩れを起こすほど積み上げられることもある。最低限のものしか持っていないティルテュには有り余るスペースだった。

騎手に挨拶をしておこう。ティルテュは馬車の正面に回り込んだ。手綱がつけられたアプトノスが退屈そうに鳴いていた。人で言うところのいびきだろうか。手綱を握っているのはメラルー、に一瞬見えたアイルーだった。首から上が黒い毛皮で、見間違えた。

メラルーっぽいアイルーは人なつこい笑顔でこちらに会釈すると、出発までしばらく時間があると告げた。ティルテュはお礼を言いながら停泊所のベンチへと歩き出す。

どうにも腑に落ちないことがあった。

野生のアイルーは白一色で、毛色が違ったり、模様がついている者にはお目にかかったことがない。しかし町中で見かけるアイルーは多種多様な毛並みをしている。

「これは何故だ……？」

染めている、では何のために。毛色が特殊な者しか人里には出てこない、しかし、白いアイルーも見かけたような記憶がある。

ティルテュは停留所備え付けのベンチに腰掛けながらうなづいた。だが、ティルテュはどちらかというところ、力に任せたい方をするハンターだった。生態について調べもするが、あくまでも狩りについて必要な範囲しか頭に入れることはない。

結論は出そうにない。それに、時間は十分にある。

「死神」というクエストはセクメーア砂漠にまで出向かなくてはならない。馬車、気球含めて往復一〇日の旅である。極端に遠い場所ではないが、帰ってくる頃にはシェンガオレンとの決着もついている頃だ。

ハンマーをベンチに備えられたテーブルにおく。その重さに軋んだ音をたてたが、ハンターが使うテーブルがこの程度で壊れるはずもない。背を預ける形で両肘をついても、テーブルは耐えていた。体が傾き、自然と首が上を向く。

空が青い。これからクエストに出れば到着は夜になるよう設定されている。繁殖期を終えると続いて砂漠には灼熱の温暖期がやってくる。人では踏み入ることさえできない世界へ豹変してしまう。このような過酷な環境はモンスターにとっても楽なものではないらしい。繁殖期には大型モンスターは夜活動することが多いような気がする。

今回の標的であるディアブロス亜種はやはり、夜間行動を行うことが報告されている。

アマランサスと夜桜狩りに行ったことはいい予行練習になった。訓練場でディアブロスの相手も幾度となく経験した。それでは角竜の頑強さを改めて教えられた。

はたして勝てるだろうか。相手は繁殖期を向かえ、警戒心と凶暴性が肥大化したディアブロス亜種が二頭。対してこちらは一人。

死ぬかもしれない。それがハンターにとってどれだけ不名誉なことかはわかっている。ハンターにとって、狩りの成功のみが名誉をもたらす。ティルテュがハンターになることを反対していた父も、絶対に死ぬことだけは許さない、そんな条件でようやく許してくれたことを思い出す。

あれほど反対していたのに、ティルテュが村を出る日には父が砂漠で拾ってきた竜骨「小」を加工して不恰好なハンマーを拵えてくれた。今はマイハウスの道具箱の中だが、時折思い出したように振りたくなる。

たとえば、どれだけ新しく強力なハンマーを手に入れても最初のハンマーが一番手になじむ気がする。

ふと、テーブルにおいたハンマーに意識が移った。イヤンガルルガの深い紫の甲殻が陽光を反射してまぶしい。まるで、今の相棒は俺だと言わんばかりである。

ついハンマーを撫でてみた。こんなに感傷的であるのは自分らしくない。道具が嫉妬しているなんて、ずいぶんと詩人ではないだろうか。

「まるで、アマランサスのようだな、ティルテュ」

自分自身に呼びかける。だが、自分を呼びかけてくるのは自分ばかりではなかった。ややこしいが、遠くから別の誰かがティルテュを呼んだのである。誰であるのか、振り向いて見るまでもなかった。

「ティルテュ〜！」

妙に間延びして甘ったるい声。あいつ以外の誰がいる。

乗らない気持ちで、小刻みな動きの首が視界を後ろへと振り向かせる。重厚なヘビィボウガンを背負ったアマランサスが片手を高く振りながら軽やかな足取りで駆け寄ってきた。

思わず頭を押さえた。桜火竜の一件では感謝しているが、アマランサスが絡むとどうもいやな予感がする。特に具体的な実害があったわけではないが、ハンターとしての本能が危険を知らせているのである。

アマランサス当人は、そんなこと一切意に介することなく、いきなり右手を差し出してきた。まるで握手を求めているような手つきで、つい手を握ってしまう。すると、アマランサスは爛漫の笑みを見せた。

「はい、またよろしくお願いします」

まるで、これから同じクエストに出向くかのような挨拶だった。まるで、そう前置きしたのはティルテュの最後の抵抗であった。アマランサスの左手には、クエスト参加証明書である半券が握られていた。

「ま、まさか……、アマランサス、君は……」

喉からなんとか息を搾り出して、すると余計に口腔が乾燥した。

「私も死神に行きまゝす。よろしくお願いします」

固まるティルテュの前で、アマランサスは妙に手馴れた手つきで

敬礼してみせた。断るなら今しかない。ティルテュは最後の気力を振り絞った。

「ば、馬鹿を言うな！ このクエストは私が1人で受けたものだ！」
すばやい手が二人のハンターの間半券を滑り込ませた。ティルテュに見せ付けているのだ。

「ティルテュさん、クエスト参加の際、人数制限をしませんでしたよね？」

たしかに誰も来ないだろうと、わざわざ一人のみと限定しなかった。ずいずいと半券が押し付けられる。確かに、「死神」への参加が許可されている。だが、ティルテュがこんなときにクエストを受けるとは誰にも話していない。クエスト・ボードに張り出されてこそいただろうが、それがアマランサスの目にとまる確率は限りなく低いはず。

このとき、ティルテュは気づいた。それはアマランサスが駆けて来た方にいた。緑の制服を着た受付嬢がにこやかに手を振っていた。見覚えがある。このクエストを受けた際、対応した受付嬢だった。

引きつった眼差しでアマランサスに視線を戻す。やはり笑顔のメイドは、少し体を傾けて受付嬢の方を手で示した。

「私、受付の皆さんとお友達なんですよ。だから、私が参加することはギルドが認めているんですって」

あの受付嬢、ギルドの規則に反していないと無理にクエストを組ませたことを根にもっているらしい。よりもよってアマランサス

を送り込んでくるとは。

繁殖期の暖かな日差しを浴びながら、ティルテュは防具の下に冷ややかな汗を感じていた。

第五話「紅衣の女中と脅威の仙高人」(後書き)

この頃、シエンガオレンに行ってません。HRが二桁のときは滅龍弾撃てるガオレンスフィアにお世話になったのに……。

第六話「紅衣の女中と黒衣の死神」（前書き）

「死神」開始です。

敵はディアブロス二頭。飛竜種の中でも、角竜はやはり苦手です……。

第六話「紅衣の女中と黒衣の死神」

角竜ディアブロス亜種。黒い甲殻に覆われるため黒角竜とも呼ばれるディアブロスの亜種である。

厳密には角竜には亜種は存在しない。

ディアブロスの雌は繁殖期を迎えると体色を黒く変色させる。この事実を知る以前は亜種と認識されていたため、生態が明らかになった後も名残として亜種と呼ばれているのである。

何故体の色を変化させるのかは現在のところ、学派は二分されている。

繁殖期を迎え産卵の準備ができたことを雄に伝えるため。いわゆる発情期を迎えた印であるとされている。これが第一の学説である。主に学者の間で支持されている。

そして、第二の学説は特にハンターによって強烈に支持されていた。

産卵を終え、子育てに入った動物は警戒心が高まり攻撃的になることが常である。ディアブロスもそれに習い凶暴な本能を剥き出しにする。子を守る母がその極限にまで高めた暴威を他に知らしめるために黒衣を纏っていると語られているのである。これは警戒色であると言われている。

どの学派もなかなか自説を曲げようとはしない。黒角竜が極めて危険な存在であるという見解に関しては、誰も異論を挟む者はいな

かった。

馬車で砂漠の入り口にある気球の発着場にまで移動してから空の旅が始まる。砂の混じった乾いた風に吹かれるのは火竜と角竜に守られた戦鎚の乙女と赤いメイドであった。

二人の間ではこのようなやりとりがかわされていた。

現在、二人が拠点としているドンドルマの街は存亡の危機にさらされている。

確かにハンターが一人二人増えたところで決定打にはなりえないことは間違いない。だがそれは防衛戦に参加しなくてもいい理由にはならない。同時にギルドは防衛戦への参加を義務づけてはいない。その証拠に受付場は閉じられることなく、クエストの参加がこうして認められている。

本来狩人がギルドに属している理由は生態系を不必要に破壊しないためである。都市の防衛を義務づけられるべきは騎士のように里が独自に雇っている者か、あるいはギルドナイトの仕事である。

では街を放つといてその結果滅びるようなことになってもかまわないと言うのか。

その理屈はすでに否定されている。

二人が戦列に加わったところで戦果にさして影響しないことはすでに衆目の一致するところにある。参加の如何によらず結果は同じ

である。

しかし、皆がそんなことを言い出せば誰も街を守らないということもありうる。そうならないためには一人一人の参加が求められる。

例外というのは不公平に他ならない。

それは違う。

対シエンガオレン戦に参加しているハンターたちは皆そのような義務感につき動かされているのではない。守りたいもの、守らなければならぬもののために戦うことを決めたのである。それを単に義務だから参加しているだけと片づけてしまうことは彼らに対する侮辱に他ならない。有志の集いに義務感で参加してしまうことはそれと同意である。

それは論理のすり替えだと反論もあった。

しかし、これは焦点をぼかしたのではなくこの問題の性質の一面を前面に出したにすぎない。

ではこの理屈に間違いはあるだろうか。

否定する場合、シエンガオレンと戦っている者は単に義務として戦っているにすぎないことに他ならない。

それは否定されるべきではない。

戦う者は義務ではなく戦っている。義務として参加しようとする場合、彼ら自分たちを同列に扱うことにもなるのである。

これ以上、反論はなかった。

ティルテュは街から一人でクエストに向かおうとしていた。それを追いかけてきたのがアマランサスである。

ティルテュはどちらかといえば力に任せた戦い方をする。アマランサスはどちらかといえば頭を使った戦い方をする。

ティルテュは気球の木でできた床にあぐらをかきながらふてくされていた。アマランサスは正座してにこやかに座っていた。

ティルテュが街を見捨ててクエストに行くとした張本人であり、論戦で有利な結論を得られた立場にある。そんなティルテュが渋い顔をしていたのは理由があった。

目の前のメイドが原因である。ティルテュは女給を睨んでいた。

「いいか、私は街の危機を放っておいてクエストに出た。それは勝手なことだ。そうだな？」

アマランサスはこともあろうに笑顔でうなずいた。いや、にこやかに肯定されたならそれはそれでいいのだろうか。

よくはない。

「なら何故君がその悪事を選んで肯定する!？」

そう、先のやりとりで、見事言いくるめられてしまったのはなにを隠そうティルテユの方である。

「普通なら君が私を説得してシエンガオレンに向かわせるべきではないか!？」

ずいぶん的外れで身勝手なことを言っているとティルテユは理解していた。だが、どうにも納得できない。赤いメイドはきよとんとした顔をした。

「けちよんけちよんに否定して欲しいんですか？」

こう言われて、思わずかたまってしまった。否定されたい訳ではないが、肯定されても納得できない。こちらがわかっていないのに、アマランサスは閃いたように胸の前で手を合わせた。

「わかりました! 私、全力で否定します!」

そういうと、笑うメイドは急に真剣な眼差しをし始めた。こうするとりりしい表情もできるのが、なんとも歯がゆい。

「ティルテユ、あなたはそんなに弱い人ですか?」。

突然のことに、呆気にとられた声が出た。

「守るべきものがない私たちが参加することは確かに誉められるべきことではないのかもしれませんが。でも! そう考えて参加しないことは二つの意味で臆病なことです!」。

まるで演劇でも見ているような気分させられる。アマランサス

の手振りは仰々しい。

「そんなに不名誉が恐ろしいですか？ 勇者の名誉を汚したと言われることがそんなに怖いことですか？」。

全力で、そう言い出したのはお前だと言ってやりたかった。

「ハンターは、確かに防衛の義務はありません！ でも、人々の助けになりたい、そう言って武器を持ったはずでしょう！ それなら街を襲う脅威と戦うことにためらいなんてないはずです！」

それならとつと街に戻れと言ってやりたいところである。しかし、そうするとこのクエストにテイルテュ自身行くことが論理的にできなくなるというおまけ付きである。

噛みしめすぎて、歯が痛くなった。

上位クエストの始まりはいつだとして慌ただし。より強靱で凶暴な生物相に好き好んで足を踏み入れる者などハンターくらいである。人里に慣れたアイルーが長居しようとするはずもなく、ギルドもそれを認めていない。

結果として気球はハンターを放り投げるように地表に降ろすとすぐさま上昇して行ってしまふ。

気球が一度地上に近づいた際、持ち込む道具の少ないテイルテュは固い岩盤にすぐさま跳び降りた。

その後気球は再び上昇してしまった。アマランサスを乗せたまま、早速離ればなれになってしまった。上位の慌ただしさにはなかなか慣れることができない。

こういつときこそ、体で覚えた手順を実践することが必要になる。まずは、付近の様子を確認することだ。

ここは、切り立った岩に囲まれた広間だった。足下も砂ではない。七番区画とされる一帯である。

岩が夜風を遮るとともに蓄積された熱を放出しているので、適度に暖かい。加え、地底湖に通じている川があるため飲み水を求めた草食種アプケロスや鳥竜種ゲネポスが群れていることも多い。

今はそのどちらもない。生命が発する音が何一つない。不気味な静寂が帳となって降りていた。

この一帯は二頭もの角竜が暴れ回っているのである。弱者はどうかの洞窟や岩窟に身を潜めているに違いない。

ディアブロスの姿もない。

ポーチから発煙筒を取り出した。拳から少し先が飛び出る程度の短いもので、ハンターはこれを使って互いの位置を確認する。先端を折ると、白い煙がまっすぐに立ち上った。

どんな原理かわからないが、風が吹いてもまっすぐに立ち上る優れものである。

東の方からも同じ狼煙があがった。距離と方角から考えて、アマ

ランススはちゃっかりベース・キャンプに降ろしてもらえたようだ。ひとまず、合流することが先決だろう。そう一步踏み出すと、足正確には足裏がむずがゆくなった。

何か踏んだらうか。足を上げてみても何もない。仕方なく足を降ろしてみる。すると、今度は膝に痺れが走った。

声が出た。静寂の間を切り裂く声が出た。首で、体で腰で足で、全身で振り返る。

打ち砕かれた地表がその亡骸を舞い上がらせていた。土砂の擦れあう音は大地の断末魔にしか聞こえない。

殺した相手の血肉を纏い、断末魔を咆哮でかき消しながらディアブロス亜種が地中から現れた。リオレイアが小さく思えてくるほどに大きい。強靱な足に支えられた胴体は、大人でも股下をぐぐり抜けてしまえる。その尻尾は天然の戦槌だった。まるで両刃の戦斧のように左右に筋肉と甲殻とが盛り上がっている。ところどころに短い棘が並び、このままハンマーにしてしまえるのではないかと思わせる。

戦槌、いや尻尾が軽く大地を叩いた。それだけで岩盤が割れ、砂が吹き上げられる。

相手がまだ気づいていない内に、別の発煙筒を出しておく。今度のは包み紙が鮮やかな赤い色をしているものだった。先端を握りしめるが、まだ折らない。

相手の出方をうかがうことにした。

ディアブ羅斯はゆっくりと振り返る。すると、その顔が見えてくる。

反り返った盾のような形をした頭殻に人の女性の胴体ほどもある2本の角が生えていた。それぞれが左右対称に弧を描き、それでも結局は鋭い切っ先を前へと突き出していた。

ねじれた角。角竜種の象徴である角が、今は黒く染まっていた。本来の角竜のような薄い白にも近い褐色ではなく、他者を一切寄せ付けない完全な黒。

間違いなく、このクエストのメイン・ターゲットである。

ディアブ羅斯亜種は首を大きく突き出し、威嚇を始めた。

発煙筒を折る。すると、今度は赤い煙が立ち上った。位置を知らせるとともに、モンスターに発見されたことを示すためのものである。

黒角竜が威嚇をやめることと、ティルテュが発煙筒を投げ捨てたのはほぼ同時だった。

ティルテュが駆けだした。黒角竜が左足を踏みしめた。

黒角竜は火竜と異なり、火を噴くことはない。空を舞うこともやめてしまった。毒が含まれる棘を持つてもいない。火炎袋を持っていない。翼は退化し、長時間の飛行には向かない。毒など、そもそも必要としないのだ。

その体こそが最大の武器である。

黒角竜がその力を全力で発揮しうる突進に入る一瞬先に、足の間
に滑り込んだ。

ハンマーを抜刀する、そのままの動作で漆黒の足に一撃を見舞わ
せた。

その瞬間に黒角竜が走り出した。地響きと土煙。ティルテユの頭
をかすめるように、剛槌に他ならない尻尾が通り抜けた。

目標をとらえ損ねた黒角竜は少し離れたところで角を上突き上
げること勢いを殺した。火竜は突進ごとに倒れ込むことでしか勢
いを殺せないほど足の力が弱い。まるでそのことを嘲笑うかのよう
に、黒角竜はすぐさま振り向こうとする。

ハンマーを大きく振りかぶったまま、急いでディアブロスへと迫
る。相手の振り向きに併せて、その角めがけてハンマーを叩きつけ
た。

黒狼鳥の嘴が左の角を削った。わずかに欠けただけで、ティルテ
ユの腕にはまるで岩を叩いたかのような痺れが伝わってきた。

脳を内包する頭は得てして衝撃には脆いものである。しかし、角
竜は例外だと言えた。その角は堅牢にしてしなやかで、打撃の衝撃
をいとも簡単に受け止めてしまう。

黒角竜が突進を再開しようとしていたので、急いで横へと前転し
て逃れた。

一撃を食らわせたはずの足を使い、悠々とその巨体が致命的な勢いでもって通り抜けた。

もう一度打撃を加えてやろうと追いかけると、黒角竜は角を大地へと突き立てた。固い岩盤が砕け、飛ぶことをやめた翼が開いた穴を広げていく、足が余分な土砂を掻きだしたかと思うと、黒角竜の巨体は地中に消えた。

飛竜種の中では角竜にのみ見られる潜行である。彼らは発達した聴覚で地上の様子を感じながら地中を移動する。こうしている間はどれほど優秀な武器をもつていてもどうすることもできない。

例外的な手段はあるが、タイミングは完全に逃していた。そんなときに絶妙な瞬間に適切な行動を起こすのは、いつも決まってアマランサスの方である気がする。どんな魔法を使ったのか、アマランサスはいつの間にか同じ区画に入り込んでいた。

「いつきますよ〜!」。

こんな声がして、ティルテュの後ろから音爆弾が投げ込まれた。爆薬が炸裂し、鳴き袋に一齐に空気が送り込まれると耳障りな甲高い音がした。

そう、角竜もまた魚竜種ガレオスなどと同様、発達した聴覚がそのまま弱点にもなっている。潜行中に大きな音を立てられると前後不覚に地上に飛び出ようとするのである。

黒角竜はその大きさが首を絞めた。地上へ地面を割って現れるも、完全には抜けられず、足と尻尾とが地中に残されていた。

もがいている間は身動きがとれない。アマランサスから催促の声がした。

「テイルテュ、早く早く」。

相手の動きを封じていられる時間は少ない。ヘビィボウガンを展開するアマランサスの声に促されるように走った。

狙いは翼膜。普段文字通り手の届かないここは、角竜の弱点の一つである。薄い膜にハンマーを一撃、二撃と振り降ろすと、翼膜が裂け血が吹き出す。

だが、出血もすぐにとまってしまふ。飛竜に対して一撃必殺は期待できない。こうして少しずつ体力と血を削る他ない。

三撃目としてハンマーを大きく振り上げた。膜が一際大きく裂け、同時に束縛から逃れた黒角竜が飛び上がる。

もはや体を支える程度しか飛行できない角竜はゆっくりと降りてくる。その間、ハンマーをかつぎ上げるように構えた。重心が低く踏ん張った状態であるため、飛竜の翼が起こす風圧にも耐えることができる。

降りてきたタイミングに合わせて、もう一度角へハンマーを叩きつける。固い感触は変わらず、しかし傷が若干大きなものとなった。

動作の重いヘビィボウガンを構えていたアマランサスは今になってようやく射撃を開始した。

使用した弾は貫通弾。

貫通弾とは呼ばれているが、実際、この弾は飛竜の甲殻を貫通できない。ではなぜ貫通弾と呼ばれているのかというと、それはこの弾の材料に秘密がある。

ハリマグロという体に無数の棘を持つ魚が使用されるのである。この魚を使用した弾は目標に命中しても弾かれることなく、弾に生えたハリマグロ由来の無数の棘が甲殻に食い込み体表を沿うように突き進む。その様がまるで貫通でもしているようだと言われるのである。

アマランサスのカホウ「狼」から放たれた貫通弾はまず尻尾に当たると、柔らかい腹側の皮膚を裂きながら腹にまで達した。弾は合計三発が発射され、その度ごとに黒角竜の表皮が裂け、地面へ一列に血が垂れる。

そのことで黒角竜の注意がアマランサスに向いた。そうなることを予期して、ティルテュはすでに腹下に潜り込んでいた。

黒角竜は足を小刻みに動かしながらアマランサスに向き直ろうとする。太い足が触れるたび、体に痛みが走る。それは、ハンマーを担いで、痛みには歯を食いしばって耐えた。そして、足の動きが止まったところで、黒狼鳥の一撃を叩き込む。

その瞬間、空気が変わった。

ディアブロス亜種が砂を後ろへと蹴りだした。喉の奥底から圧縮された大気が黒煙を纏って吐き出されていた。怒り状態と称される状態へと変貌した。

敵の危険性を感じ取った場合の防衛行動である。その性質は様々だが、ディアブロスの場合、攻撃力とスピードが極端に上昇する。ようやく、本気になったということである。

急いで足元から離れた。この状態のディアブロスに不用意に近づいてはならない。

ティルテュが離れたこととほど同じタイミングで、黒角竜は再び潜行を開始した。潜る速度が桁違いに速い。そして、怒りから離れたディアブロスに音爆弾は効果がない。

相手が飛び出るのを待つほかない。アマランサスはヘビィボウガンを展開したまま、前転を繰り返して、元いた場所を離れた。

ディアブ羅斯は潜った瞬間にハンターがいた位置を記憶して飛び出す場所を決めるといふ経験則がある。優れた聴覚を持っているはずだが、なぜこのような行動をとるのかは明らかでない。ともかく、同じ場所にいることはできない。

ハンマーを担ぎながらその場所を離れた。その途端、土が爆ぜた。二本の巨塔が天を貫いた。地中からの急襲の直撃を受けた場合、どんな高さまで跳ね上げられてしまうのか想像したくもない。そう見上げていると、角が落ちてきた。

まだ十分に離れきっていなかったのである。幸い、ほとんど勢いはなくなっていたが、方角が肩に当たり、つい両膝をついた。

だが、悲鳴などあげてやるものか。

悲鳴をかみ殺したまま立ち上がる。すると、黒角竜は突進を開始

しようとしていた。

逃げている時間はない。端も外聞もかなぐり捨てて、走り出すとともに体を前へと投げ出した。まるで川にでも飛び込むような姿勢で地面に倒れこむ。胸を強打してしまっただが、突進に巻き込まれることに比べれば遙かにましである。

恐ろしいまでの勢いで、黒角竜は通り過ぎていった。

怒り状態のディアブ羅斯は手に負えない。攻撃に一定の時間がかかるハンマーにとって、突進を無闇に繰り返す相手とは相性が悪い。起き上がりながらディアブ羅斯亜種が振り向く様子が見えた。

何度も飛んではスタミナがもたない。こんなとき、ガードのできないハンマーは脆い。

幸か不幸か、ディアブ羅斯の狙いはティルテュではなかった。となると、標的はアマランサスしかない。

逃げる。

その声をかけようとしたところ、アマランサスはとっくに逃げていた。七番区画のほぼ中央にまるで植えられたように突き出している岩石の後ろに隠れていた。

怒りに血が上ったディアブ羅斯亜種はそんなことかまいはしない。土煙を上げながら突進を開始する。やがて、岩石に衝突し、角が岩盤をえぐっていく。間もなくアマランサスに届いてしまうのではないかとこのころまで碎き進んだところで、ディアブ羅斯が急に動きを止めた。

片方の角が岩石の固い部位に囚われ、身動きが取れなくなったようだ。

あと少しでディアブロスの顔に触れてしまえるほどの場所で、アマランサスはすでにボウガンを構えていた。

赤いメイドと黒衣の角竜。今更だがなんともシユールな光景である。

黒狼鳥の毒々しい色をした甲殻に包まれたヘビィボウガンが弾を吐き出す。すると、メイドは思いのほか大きな反動を受けていた。これだけでも弾頭が大きい特殊弾を用いたことがわかる。

使用された特殊弾は、毒弾だった。角に命中し、紫色の煙が放出されたことでわかる。毒を直接モンスターの血中に送り込む物騒な弾である。だが、この弾はもう一つの特徴があった。それは、弾自体に攻撃力がないこと。そして、毒素が発する腐食毒が固さや性質に関係なく甲殻を蝕むということである。

強靱な角であろうと関係なく、毒が染み込み、腐食させる。アマランサスはゆっくりとした動作で次弾を装填すると、角に毒を浴びせかけた。

この間、もがくディアブロスを眺めているつもりはなかった。角はアマランサスに任せ、もう一度腹下に潜り込む。動かない相手を攻撃することは簡単である。足に二度打撃を叩きつけ、とっておきの三打目は腹へと振り上げた。

黒くてよくわからないが、内出血を起こしたように皮膚の一部が

変色した気がする。

こうしている内に、黒角竜は角を抜き、束縛を脱した。抜いた勢いで首を大きく上げていた。そんな瞬間でさえ、アマランサスの狙撃は容赦がない。三発目の毒弾が左角を蝕む。

このことで、ディアブロス亜種はアマランサスを危険な相手とみなしたらしい。黒煙を吐き出しながらメイドを威嚇し始めた。

巨竜に睨み付けられたなら誰とて恐ろしいものである。それなのに、アマランサスは微笑みさえ浮かべて、弾を装填していた。発射された毒弾は、乾いた音を立てた。

漆黒の角が、地面に突き刺さる様がゆっくりと見えた。そう、折れたのである。

ディアブロス亜種が苦悶の声を発しながら大きく仰け反った。

アマランサスはどこかでメイドとして働いていたなんて言っていた奴がいたが、そんなはずはない。ここまでできるメイドなど、世界中探してもいないだろう。

角竜の象徴である角を折ったこと。それは名誉なことではあったが、勝利を約束するものでは決してないことを失念していた。

声を聞いた。それはこの砂漠に降り立った直後にも聞いたものであった。土が弾け、二頭目のディアブロス亜種がその姿を現したのである。健在な双角を顕示するかのように、二頭目のディアブロス亜種は首を曲げて、それから天を仰ぐように咆哮を発した。

音は音である。それ自体に威力はないはずが、細かな砂が舞い上がり、土ぼこりが起きた。大気が恐怖のあまり鳴動しているのかわよう。

子どもの頃、真夜中に聞こえてくる正体不明の音に言い知れない不安を覚えたことはないだろうか。そんな恐怖が具体的に、具現化した存在が目の前にある。

この暴音の前ではどれほど優れたハンターであろうと、防護装備なしでは頭を抑えて震えているしかない。ティルテュは音を防ぐガールガフェイスと空気の振動を緩和するリオレウス、ディアブロスの鎧に身を包んでいる。咆哮の影響を受けることなくすんでいた。

しかし、アマランサスは違う。肩から下げられたベルトにヘビィボウガンのことを完全に任せきり、両耳を塞いで縮こまっていた。見たくもなかったが、苦しそうなアマランサスの表情を見ることは初めてのことである。

「アマランサス！」

たとえ動くことができても、それは役に立つことはなかった。

蜘蛛の巣にかかる蜘蛛はいない。中毒を起こす毒蛇はいない。自身の声に怯える竜などいようか。

方角のディアブロス亜種は大音量の中、平然と体を回転させた。遠心力で加速した尻尾がアマランサスの体を捉えた。

ハンターになっていくつも珍しい光景を見てきた。その中の一つは、人は思いのほか軽いということ。メイド服を纏った少女の体

はディアブロスを飛び越えられるのではないかといくらに跳ね飛ばされ、固い岩肌を滑るようになるとまった。

「アマランサス!!」

少女が呼びかけに応えてくれることはなかった。身動き一つなく、その小さな体を夜空の下に横たえていた。

第六話「紅衣の女中と黒衣の死神」(後書き)

きつと、ハンマー二回叩きつけて、毒弾四、五発撃ち込んだただけでは角は折れないと思います……。

第七話「紅衣の女中と亡国の夢」(前書き)

三週間しかあけていないつもりで、四週間がたっていました……。
月日がたつのは早いものですね。

第七話「紅衣の女中と亡国の夢」

冷たく寒い。砂漠のただ中でこのような感想を抱く度、違和感を
感じ得ない。

多くの者にとってそうであるように、ティルテュにとっても砂漠
とは灼熱の大地であると考えている。故郷の村は砂原に面した場所
にあり、子どもの頃からずっと太陽に焼かれる砂を眺めてきた。

ここは洞窟の中であつた。でこぼこの岩肌が冷気を吸い取つたよ
うに青白い景観を演出している。この寒さは洞窟の奥に満ちている
地底湖から這い出たものだ。

洞窟にはベースキャンプに通じる砂漠へと抜ける通路があるが、
夜間は地底湖が水かさを増し、通路を浸水させてしまう。

南の砂漠を抜けて大きく迂回しなければキャンプに戻ることがで
きない。

ティルテュはともかく、問題はアマランサスにあつた。

ディアブロス亜種の一撃をともに浴びたアマランサスは意識を
完全に失っていた。洞窟の中にまで無事かつぎ込めたことは幸いで
ある。

アマランサスは冷たい床に寝かせた。大事には至っていないよう
だ。ディアブロスの強靱な尻尾からの一撃を、布切れの寄せ集めで
しかないメイド服がかるうじて緩和したのだ。あまり認めたくはな
いが、メイド服も立派な防具の1つであるということになる。

しばらくすれば目を覚ますことだろう。

その時改めてディアブロス共に返礼にうかがおう。

ポーチから小瓶を取り出す。中には赤い液体が八分目まで満たされている。ホット・ドリンクである。この洞窟のように寒い場所でスタミナが奪われることを防ぐための飲み物である。一息に、勢いをつけて飲み干す。

にが虫とトウガラシをすり潰し、水に溶かしたこのドリンクは凄まじく苦く辛い。体を温める飲み物というより、無理矢理発熱を促すような無茶な飲み物である。

たしかに体は温まったが、口の中にはにが辛いという造語でなければ表現できないような混沌とした状態になる。両手を思い切り振り上げた。こうでもして気合を入れなおさなければ耐えられそうにない。

これを口にする度にハンターをやめなくなる。

砂漠が暑いものと感覚が覚えているのは、ホット・ドリンクを飲みたくないという拒絶反応の裏返しであるのかもしれない。

もっとも、暑ければ飲むことになるクーラー・ドリンクはにが虫を氷結晶といっしょに潰したもので、苦さとともに頭痛が走るほど口の中が冷える。

やはり口にする度にハンターをやめてくなる味がする。

そういえば、ハンターを志したのは、砂漠での生活に嫌気がさしたことも理由の一つであった気がする。

体が温まったことを確認してから、アマランサスの隣に座る。とてもハンターには見えない少女はまだ目を覚まさない。

この娘はなぜ、このような格好をするのだろうか。デザインさえ考へなければもっと射撃に適した装備もあるだろう。もっと楽な生き方というものがあるはずなのだ。

突然、床を叩く、固い音がした。見ると、壁に立てかけてあったハンマーが倒れ、柄がティルテユの方を向いていた。

何でもない光景であるはずが、妙におかしい。つい軽く笑ってしまった。

巨大なモンスターを相手に日銭を稼ぐハンターを生業としているティルテユに楽な生き方だとか言えた義理はない。父にも言われたものだ。もっと安全な仕事もあるだろうと。なぜそんな危険な仕事を選ぶのかと。

もう四年も前の話だ。父は娘を氣遣ってそんなことを言ったのだろうが、当時のティルテユには反感しか生まれなかった。

そう言う父こそが、家族をないがしろにしてまで危険な仕事を行っていたからだ。

父は砂漠に眠る古代の遺跡を発掘することをその生きがいとしていた。もう人が足を踏み入れることをやめてしまったような奥地に
出向き、時に何週間も帰ってこない。父が不在である時、母はいつ

も父を心配し、心をやせ衰えさせていた。

ティルテュに芽生えたのは父への反感以外の何者でもなかった。

自分勝手なことばかりして母を苦しめる父を許すことができなかった。そんな不満を爆発させたのが、四年前のあの日だった。

近くに石が落ちていた。摘み上げるにちょうどいいくらいの大きさで、拾って見ると冷たさがグローブを通して伝わってくるような気がする。この石を、思い切り床へと放り投げた。

あの日も同じことをした。

一月ぶりに帰ってきた父に、ハンターになりたいと伝えた。父は反対した。

ハンターになりたいと考えたことに、切っ掛けなどなかった気がする。ただ、父への反発の裏返し、あるいはあてつけであったのではないだろうか。

娘が危険な仕事をすることは反対するくせに、自分は家族に心配をかけることが許されるのか。家族が明日も知れない危険なことをすることはどんな気持ちだ。

そう、見せ付けてやりたかった。

父はどちらも選ぶことができなかった。ハンターになることには反対し、同時に遺跡発掘をやめるとも言わなかった。

激昂した。怒りに我を忘れてしまった。

父が持ち帰った古代の壺を床に叩きつけて壊した。壺は綺麗に大きな3つの欠片に割れて、その欠片を父は無言で拾い集めていた。

これは余談だが、六五〇〇〇ほどの価値があつたそうだが、割れてしまったことで一五〇〇〇ほどの価値しかなくなつてしまつたそうだ。

その翌日、ティルテュは家を出た。あれから四年の間、一度も家に帰っていない。母と手紙のやり取りは続けていたが、父と顔を合わせるつもりにはどうしてもなれなかつた。

だから手紙で知ることになる。父が探検に出かけて、ついに戻つてこなかつたという事実を。

砂漠と雪山。一見正反対の二つの地方は、一つの共通点を有している。どちらも過酷な環境であるということである。

砂漠は温暖期には立ち入りが禁止される。太陽がすべてを焼き尽くさんばかりに猛るからである。

雪山は寒冷期に入山することができない。絶えず吹雪き、遭難する可能性が蓋然性にまで高められるからである。

温暖期、寒冷期、繁殖期、そしてまた温暖期。こうして繰り返される季節の中で、人を寄せ付けない期間を両者は有するのである。

このことがもたらす弊害は数多い。

たとえば、砂漠に生息する生物は生態系が未解明のものが他の地方に比べて多いことである。繁殖期を迎え生まれた仔がどのように温暖期を乗り越えるのか、まるでわかっていないのである。また、繁殖期の雌は非常に気が立っている。生まれたばかりの子どもを目にするだけでも非常に大きな危険が伴う。

ここに、ハンターたちが恐れる1つのクエストが存在する。

死神。

繁殖期に黒く体色を変えるディアブ羅斯の雌が、二頭そろって同じ地方に出現するクエストである。毎年同じように二頭そろって繁殖行動を行うのである。

これまでディアブ羅斯は群れをなすことは確認されていない。子育ても雌が単独で行い、つがいでの行動さえ観察されていない。

ではなぜこの二頭は同じ場所に集うのか。このことを知る者は誰もいない。

アマランサスが意識を失っている間に、テイルテュはポーチからぼろぼろのメモ帳を取り出した。広げて見ると、父の字で白い隙間がないほど書き込まれている。母から送られてきたものだ。父の遺品として。

その大半はテイルテュには意味のわからない古代文明への考察であったが、興味深い内容も含まれていた。

死神で二頭のディアブロスが揃う理由を、父は彼女らが双子であるからだと書いていた。

はじめこれを見た時は思いつきり顔をしかめたものだ。だが、父は学者らしく、様々な観察について記載していた。

ディアブロスは通常、一つの卵しか産まない。これはティルテュも知っていることだ。産む数が少ないため、一度に複数個の卵を生む火竜の卵を納品するようなクエストはあっても、角竜の卵を持ち去るようなクエストは許可されていない。

だがまれにディアブロスも複数の卵を産むことがあるのだそうだが、そうして生まれた個体はともに行動することが大変多く、それは繁殖期でも同じではないかと結論付けていた。

メモを頭上にかざす。特に何かが起きるわけではないが、何かわからないことがあるとこうして頭上ですかしてみるのは癖のようなものだ。いつかはアマランサスも担ぎ上げて見ようか。

それはともかく、このメモには大きな疑問点があったのである。父は考古学者であって生物学者ではない。それがどうしてモンスターを観察を行っているのかということである。

父が行方知れずになったのは今年の繁殖期であった。それから約一年をかけてその疑問を調べようとしてきた。

死神。このクエストに父がこだわった理由を探してきたのである。

それはすべて、父の唯一の遺品であるメモ帳の中にあった。遺跡

を発見する。そのためにはディアブロスの力が不可欠であったのだ。

父が捜し求めてきた古代文明の遺跡は、幾星霜の時を経てすでに砂中に埋没してしまっている。とてもではないが、人の手で掘り起こすことはできない。しかし、父は人の手でなければ掘り出せるのではないかと考えた。

そこでディアブロスの出番である。

ディアブロスは繁殖期を迎えた際まず巣を作ることから始める。巣は砂を掘り進んで作られる。それも毎年同じ場所に穴を掘るのである。

父は、ディアブロスの中に遺跡に達する場所に巣を作る個体がないかと探したらしい。人でだめならモンスターの手で遺跡への道を作ろうとしたのである。

そのように好都合な個体はなかなか見つけることができなかつた。場所がずれていては話にならない。場所が適当でも十分な深さがなければ意味がない。

その点、双子のディアブロスは最適であつたらしい。場所が父が目的とする王墓に近く、その上、二頭分の穴を掘るのである。

このことを発見した父の興奮は文字通り手に取るようにわかる。メモ帳の文字がその部分だけひどく歪んでいた。そして、続く文字は震えていた。

ディアブロスが巣を掘るのは繁殖期の間だけである。温暖期には砂漠に入ることができない以上、寒冷期に変わる頃には巣穴は砂で

塞がってしまったっている。遺跡に潜るには繁殖期を除いて他にない。

だが、そこにはディアブロスの子どもと、子を守る母がいる。

命と夢を天秤にかけて、父は夢を選んだ。そういうことなのだろう。

メモはここで終わっている。何度も読み返した。この続きが書かれることは永遠にない。

「父さん……、あなたがそうまでして何を見たかったものとは一体何です……？」

答えが返ってくるはずがない。それでもつい口にしてしまった。まさか答えがあるとは夢にも思わずに。

「ハイパーボリア文明の第三王朝、エイボン二世のお墓ですよ」

極端に間延びした声。

振り向くと、アマランサスが後ろからメモを覗き込んでいた。もう体調はよいようで、普段通りの笑顔を貼り付けている。

メモを閉じて立ち上がる。

「起きていたなら声をかける。まったくいつから見ていた？」

一度メモを見せびらかすようにアマランサスに突きつけた後、ポーチの中に放り込む。

「テイルテュがメモを取り出して読み始めた時からです」

掌を胸の前で合わせるポーズはアマランサスにとって癖のようなものだろう。何度も見せられたきた気がするが、その度に呆れとも諦めとも言える感情を抱かされてきた。

こうしてため息をつくのも何度目のことか。

「はじめからか……」

もちろん、アマランサスに悪びれた様子はない。本当に、一体どんな育ち方をしたらこのような傍若無人の性格ができあがるのだろうか。

あくまでもマイペースに、アマランサスはヘビィボウガンを拾い上げた。黒狼鳥の甲殻で包まれたボウガンは決して軽くはない。それをまるで力など入れていないような態度でアマランサスは背負う。

「テイルテュが死神にこだわったのは、お父様を探すためだったんですねえ」

ハンターと言えども勝手に狩場に入り込んで言い訳ではない。それどころか、ハンターだからこそ狩りに出かけるにはギルドの許可を必要とする。

勝手に大型モンスターを狩ってしまうとする。すると、食物連鎖の頂点が突然消失したことによってゲネポスなどの小型捕食者が数を増やすことになる。それは草食種の減少に繋がるかもしれないし、あふれたゲネポスが人を襲い始めるかもしれない。

どのような事情があれ、ギルドの意向に反した狩りは身勝手以外の何者でもない。

身勝手に死んでいった父を探して身勝手な娘が決まりを破る。そんなことは笑い話にもなりはしない。

「どうせ死んでるだろうが、形見の一つくらい見つけてやっても罰は当たらんたる」。

今度得物を取り上げるのはティルテュの番だ。床に投げ出されていた黒狼鳥の嘴から伸びた柄を握り締める。腕に確かな重みが伝わることを実感しながら、ハンマーを一気に背負う。

アマランサスは片手を大きく突き上げた。

「頑張りましょう！ お父様のためにも！」

どうもこのような調子にはついていけない。適当に相槌を打っておくにとどめた。

父が行方不明になったのは去年の繁殖期。その知らせを受け取ったときには繁殖期が終わりを迎えた頃だった。温暖期に砂漠を歩きまわることはできない。続く寒冷期はディアブ羅斯を倒すための準備に費やした。

今期の繁殖期が最初のチャンスになる。同時に、最後の機会でもあるだろう。変化の激しい砂漠で父のいた痕跡などすぐに風化してなくなってしまう。

今期でだめなら諦めると決めていた。

無論、まだ狩りは始まったばかり。諦めるには早すぎる。

洞窟北側の通路から七番区画、先ほどまでディアブロスたちと戦っていた場所に戻ろうと体を向ける。すると、アマランサスが後ろから大きな声で呼びかけてきた。

「ティルテユ、こっちですよ！」

南の砂漠に通じる通路の方で、アマランサスが手を振っていた。かと思うと、こちらがとめる暇もなく走り出してしまった。

呼びかけは間に合わない。

「お、おい……」

伸ばした右手は、むなしくアマランサスの背中を追っただけである。

仕方なく、南の砂漠に出ることにした。

足音と防具のこすれる音が反響する。外からわずかに差し込む月明かりがかるうじて洞窟の通路を晒していた。月の光に導かれるように、洞窟を抜けた。

冷気は大差ない。冷水を浴びせられたような寒さが風となって砂を舞い上がらせていた。

空から降り注ぐ青い光は砂と岩で満たされた世界を染める。それがさも不満であるかのように、轟音が空を弾く。

咆哮を上げるディアブロス。その色は漆黒であり、角は片方が欠けて落ちている。砂原の真ん中で、暴虐なる母はティルテュとアマランススを待ち構えていた。

第七話「紅衣の女中と亡国の夢」(後書き)

今回は戦闘はなしでした。ティルテユの独白が多いため、あまり動きもない内容になってしまいました。そのためか、ちょっと短めです。

第八話「紅衣の女中と黒白の猫さん」(前書き)

フロンティア、ボウガンにまつわるシステムが大幅に見直される
そうです(2010年4月現在)。火事場の効果が弱められたり、
毒弾、麻痺弾の威力が減ったりするそうです。この小説のようにへ
ビィボウガンで毒弾をばら撒けばどんな敵も大ダメージとはいかな
くなるかもしれませんね。

剛種ナナ・テスカトリ、ケムリ玉八メにどれくらい影響があるの
か、懸念する声がちらほら。

第八話「紅衣の女中と黒白の猫さん」

片角のディアブロス亜種が黒きことは自分ばかりでよいと、そうとでも言いたげに夜闇を裂いて駆け抜ける。湾曲した角は決して鋭くなく鈍い切っ先をさらしている。鋭い必要などないのだ。獣に鍛錬など不要のように、ディアブロスに刃など必要ない。

強靱な四肢から繰り出される突進は、砂煙を引き連れてテイルテユが先ほどまでいた場所を通り抜けた。

ディアブロスを挟んで反対側にはうまく逃げたアマランサスの姿もある。

アマランサスが背中からカホウ「狼」を取り出し右脇で構えると、折り畳まれていたヘイボウガンが一直線に展開する。その銃身は、黒狼鳥イヤンガルルガが火炎弾を放つ時の低く延びた背中を彷彿とさせる。

引き金が引かれる。するとけたたましい破裂音が四連続し、カラ骨を弾体に用いた口径の大きな弾が振り向こうとしていたディアブロスの背を捉えた。

着弾と同時に紫色をした腐食性のガスが発生する。ガスはモンスター甲殻を蝕むとともに毒素を血流に浸透させる。このディアブロスはこれまでも多数の毒弾を浴びせられている。毒による体力の消費も十分に期待できるはずだ。

アマランサスばかりに任せるつもりはない。

ティルテュは振り向いたばかりのディアブロスの体の下に潜り込んだ。目の前には人の胴体よりも太い脚が二本そそり立つ。

ハンマーを抜刀して、その流れのまま右脚を叩く。力の乗らない一撃ではあるが、ハンマーの攻撃方法の中でもっとも早く出せる攻撃である。

ディアブロスはまるで痛みなど感じなかったようにティルテュを無視してアマランサスの方へと突進を繰り返した。

巨体がティルテュの頭上を通り抜ける。

アマランサスはヘビィボウガンを構えたまま、体を投げ出すように前転した。それを三回ほど繰り返して、ディアブロスの跨ぐ経路から逃げ出す。

ヘビィボウガンは背負っている時はそうでもないが、構えている時には極端に重心の位置が悪くなる。どうしてもゆっくりと担ぐように歩くことしかできなくなるのだそうだ。

移動速度が極端に遅いため、広範囲を移動するディアブロスのような相手は苦手としているはずだが、アマランサスはよくやっている。

あれでメイド服でなければどれほどいいかと考えるのはこれで何度目のことだろうか。

ハンマーをしまい、ディアブロスを追いかける。多少機動力に優れるハンマーであっても、歩幅には圧倒的な違いがある。

離れられたらめげずに追いかけて続けるしかない。

だが、テイルテュは気が短いことを自覚している。アイテム・ポーチから手の感触のみで閃光玉を取り出した。

桜火竜に有効であつた閃光玉は黒角竜に対しても威力を発揮する。本当に、桜火竜との一戦はよい予行練習となつた。

走りながら閃光玉を放つた。ちょうど、突進の勢いを消して振り向こうとしているディアブロスの鼻先で、閃光が爆ぜる。

飛竜がなんともか細い悲鳴を上げて仰け反つた。

黒角竜も桜火竜同様、視界を塞がれると突進をやめ、その場で暴れるだけになる。

ガンナーにとっては一方的に攻撃する好機である。アマランサスは毒弾を次々と角竜の甲殻へと食い込ませる。

テイルテュは腹下にもぐり込み、先ほどと同様にハンマーの抜刀を右脚にたたき込む。今回はまだ終わりではない。

縦に一撃、二撃と脚へとたたき込む。そして、大きく息を吐きながら声を張り上げる。三打目は勢いよく振り上げ、柔らかい腹へと黒狼鳥の嘴が突き刺さる。

これにはさすがのディアブロスもうめき声を発した。

角竜は確かに強靱である。頑強でもある。しかし希少な種ではないため、狩猟方法は確立しているのである。

一頭を狩るのだとしたら、決して恐ろしい相手ではない。

鼻歌を歌います。昔、とても大切な人から教えてもらったお気に入りです。

大体三〇秒で歌い終わられるからです。それは、目が痛くて苦しそうにしているディアブロスさんの視力が回復するまでにかかるおおよその時間です。

こうして歌っているだけで、どれくらいでディアブロスさんがアマランサスを見てくるかわかっちゃいます。

今ちょうど、一番盛り上がる場所です。これで、残り一〇秒くらいだっってわかります。

さあ急いでボウガンをしましましょう。

ディアブロスさんが目を閉じている内にパーティの準備を始めましょう。あつと驚かせたいですもんね。

ディアブロスさんに気づかれないくらい遠く離れた場所まで走ります。こんな時、スカートって本当に足を動かしやすいんですよ。

この辺でいいですよね。

見ると、ティルテュとディアブロスさんが追いかけてこしています。

今の内です。

アイテム・ポーチから取り出したのはシビレ罨。細長い筒の中に麻痺袋を仕込んだ一品です。これを使えばどんなモンスターもイチコロです。

ゴムみたいな皮を持つ毒怪鳥さんには何故か効きませんが。

まず砂をかき分けて手頃な穴を掘りましょう。できたらシビレ罨を半分くらい埋めます。砂をしつかり固めましょう。

筒の先端から紐を引き出して、それを四方八方に投げましょう。蜘蛛さんの巣みたいに筒の周りに張り巡らします。

紐には麻痺袋から流れ出た麻痺毒が染み込んでとても綺麗な黄色です。

これで、シビレ罨の完成です。

続いてアマランサスの手には発煙筒です。指の間に二本の筒です。一つはティルテュに届いてくださいな。でも残りの一つはもっと高く、空に届いてくださいな。

ハンターさんが使う発煙筒は、同じ区画と違う区画とだと使うものが違います。ティルテュとアマランサスは同じ場所。だから匂いが出る発煙筒です。

火をつけると独特の匂いがして、ティルテュならきつとここに罨を張ったことを気づいてくれますよな。

残りの一本さんには火をつけると、匂いなんてありません。ハンターさんに割り当てられるどの色とも違う煙がまっすぐに立ち上ります。

これは気球さんへのラブレター。

上位さんのフィールドだと、爆弾さんとか大きな物を仕込んでおくなんてできないことが結構あります。だから気球さんに預かってもらいまして、発煙筒の合図で落としてもらいます。

照れ屋の太陽さんが隠れてしまいましたこの暗い空の上から、パラシュートで大タル爆弾が二つ降下してきます。

気球さんナイスです。

大タル爆弾はシビレ罨の上に落ちました。いい感じですよ。

ティルテュ、こちらの準備は終わりましたよ。

再度閃光玉を浴びせる。視界を潰されたディアブロスが尻尾をでたらめに振り回しているその隙に、腹の下で三連撃を見舞う。

柔らかくはあるが分厚い皮膚に覆われた腹部は破けてやぐれない。

内出血の痕でも見られればまだ張り合いがあるが、黒い皮膚の上からでは確認のしようがない。

かまわず、もう一度ハンマーを大きく振り上げた。

黒狼鳥のハンマーがディアブロスの腹部を強打すると、黒角竜がうめき声とともにその体を浮き上がらせた。

ハンマーは確かにディアブロスに傷を負わせた。しかし彼女を仰け反らせたのはティルテュではない。そこまでの手応えはなかったのだ。どうやら、アマランサスの射撃の成果であるようだ。

そして、遠くから鼻腔をつく匂いが流れてきた。ハンター同士がサインとして用いるもので、どんな新米ハンターでもその方向とだいたい位置くらいならわかる。

砂漠には満足に目印になるものはないが、あらかじめ把握しておいた位置関係から、アマランサスがいるのは北側とわかる。この区画唯一の障害物である鋭い岩山のすぐ側から断続的に光沢が届く。

アマランサスがシビレ罫を張ったらしかった。

相棒の方へ気をとられていると、ティルテュの上に影が落ちた。

ディアブロスからすでに閃光玉の効果は解けていた。その目はすでにこちらを捉えている。

回避は間に合わない。

ディアブロスは大きく尻尾を回すと、その遠心力に引っ張られるように体を90度回転させた。その段階で脚が強く砂を噛む。

強靱な尻尾を有する飛竜種に共通して見られるこの脚捌きは、再度尻尾を回転させる前触れである。

脚が砂を飛ばす。その力は脚を伝い、腹部を這い、長く延びた尻尾の先端へと伝播する。九〇度回転した時点で動きを止めた尻尾は再び躍動し、一気に振り抜かれた。

この間、テイルテュにできたことと言えば必死に距離をあけようと足掻いただけである。逃げられないと頭では理解しながら。

抱えるハンマーよりもなお巨大に膨らんだ尾部はテイルテュの側頭部を強打した。

文字通り頭が割れるような痛みを覚えながら、それをこらえる間もなくすぐさま背中が砂に叩きつけられる。それで終わりならまだいいが、何度も砂の上を転げ回る羽目になった。

ようやくうつ伏せの状態で止まった。

打たれた箇所を手を当ててみる。幸い、ガルルガフェイクは割れてもいなければ中身が漏れている様子もない。首も無事なようだ。

つくづく黒狼鳥は頑強な甲殻を有しているのだと思ひ知らされる。黒角竜の攻撃力にしる、黒狼鳥の堅牢さにしる、ハンターというものはほとほと化け物を相手にしているらしい。

手はハンマーをしっかりと握りしめていた。狩り場で得物を手放すハンターなどいるものか。

ハンマーを支えに立ち上がる。まだ頭に痛みが残り、すぐには動けそうにない。

それなのに、ディアブ羅斯はこちらに体を向けていた。

アマランサスが罾を仕掛けている間、少々暴れすぎたらしい。すっかり目を付けられてしまった。

さすがに二連続を浴びるのはまずい。動かない足を無理に動かそうとしたところで、動いてくれはしない。

ディアブ羅斯の顔が低く、前へと突き出された。威嚇ではない。これから突進するとわざわざ告げてくる前動作だ。

突進をかわすには心許ないほどの近距離で、ディアブ羅斯の大きな顔がよく見える。

その顔はところどころがうつすらと紫色の化粧をしていた。

モンスターと言えども、女は女なのだ。こんな冗談を考えたのは余裕というより自棄である。

この冗談はお気に召さなかったようだ。特にこの死化粧を施した弾丸は怒りを露わにした。

死化粧。

風切り声を上げて、アマランサスの放った毒弾が飛来する。ディアブ羅斯が顔色を紫にしている主要因がこれである。

毒弾がディアブ羅斯の頭に残る角を捉えた。着弾と同時に弾体が砕け、密封されていた腐食毒が紫の煙となって角を伝う。わずかな瞬きさえできないほどの時間をおいて、軋む音と砕けた音が重なっ

た。それを呑み込むようにディアブロス亜種の悲鳴が響きわたった。何とも力のない声を上げて、まるで折れてしまった角を惜しむように首を上に向けて振るっている。

このディアブロスの様子は逃げ出す好機に他ならない。

ハンマーをしまい、アマランサスの方へと駆け出す。向かう先ではヘビィボウガンを構えるメイドがいる。

毒弾は発生する腐食毒に威力を依存するため、飛距離によって威力が減衰することはないと聞いている。当てられる自信さえあれば射程内のどんな距離からでも有効な攻撃を当てられるのだそうだ。

アマランサスがディアブロスの角を叩き折ってみせたように。

そして、今のディアブロスは猛毒に苦しんでいるはずである。腐食毒は血管にまで浸透すると毒素として全身を巡る。それが一定以上の濃度となると、不思議とモンスターの顔面に紫色の斑点が出現する。

黒い顔で見えにくかったとは言え、ディアブロス亜種の顔には明らかに毒に当てられた兆候が見られた。

ティルテュが走っている間にも、アマランサスは柔らかな微笑みを張り付けたまま毒弾を見舞っている。

いくら強靱なディアブロスでもダメージを蓄積していけば必ず倒すことができる。

戦意を新たにしたところで、ようやくアマランサスの場所にまでたどり着いた。メイドの横で立ち止まり、振り向くと、ディアブロスはずでに走り出していた。すでに角は両方とも折れているが、その迫力たるや微塵も衰える様子がない。吐く息に黒煙が混じり、その体躯が砂漠を揺らして疾走する。

そして、シビレ罫に足を踏み入れた。

脚の筋肉が一気に痙攣し、ディアブロスはおかしな格好で上方へと仰け反ったかと思うと、頭を低く首をおかしな方向へ曲げて全身を小刻みに振るわせるようになった。

麻痺袋が含有する麻痺毒の恐ろしさは筋肉に直接さようして自由を奪うことにある。その量さえ十分ならどんな膂力を持つモンスターであろうとも逃れることはできない。

今頃、シビレ罫の脇に大タル爆弾が仕掛けられていることに気づいた。すでに、アマランサスは狙いを定めていた。

「テイルテュ、行きますよ」

ポウガンから弾が発射され、大タル爆弾の爆発が大気を振るわせ、砂をはね飛ばす。

張られていたシビレ罫の綱を引きちぎって、ディアブロス亜種が倒れ込んだ。爆風にさらされた脚をまるでさするようにこすり合わせ、立ち上がれずにもがいている。

今が好機と、駆け寄る気にはなれなかった。

爆発はやんだ。しかし、砂が未だに振動している。

砂を切り裂いて2本の黒くねじれた角が高く、高く空へと放り投げられた。もちろん、そのすぐ下には屈強なディアブロス亜種が張り付いている。

さも傷つき倒れた姉妹を守るように、もう一頭のディアブロスが地中から、ティルテュと角を失ったディアブロスの間の大地を裂いたのである。

合流されてしまった以上、数では同数。質ではハンターなどモンスターの下にも及ばない。

逃げるべきだ。

ハンマーほど動き回れる武器ならともかく、ヘビィボウガンは移動の他、武器の出し入れに関しても動きが鈍い。複数頭との戦いは不得手なはずだ。

ティルテュは大きく砂漠の夜気を吸い込んだ。

「アマランサス！」

逃げる。そう叫ぼうとしたのだ。だが、それは叶わなかった。

アマランサスはすでに全速力で逃げ出していたからである。その判断の早さに感心すべきか、それともその変わり身の早さに呆れるべきか、ティルテュには判断ができないでいた。

は、い、子猫さん、マタタビですよ。

仲良しのディアブロスさんはなかなか離れてくれません。いくら一緒にいたくても、時にはそれぞれの時間を許し合える方が息も詰まらなくて健全な関係だと思いませんか。

南の砂漠から未だ動く気配なしです。こんな時は無理しちやいけません。

マタタビ片手に寝そべって、アイルーさん、メラルーさんとじゃれている方がいいですよ。アマランサスが掴んだマタタビ振る度に猫さんが飛び跳ねます。

この九番区画って、いつも猫さんがいていいですよ。さすが猫さんの隠れ家だけありますよね。岩山にぼっかり空いて窪地で、飛竜さんが入り込むだけの広さはありません。

猫さんの彫像や拾ってきたガラクタが無造作に積み重ねられて、本当に別空間。憩いの場所ですよ。

ね、そう思いませんか、ティルテユ。

ちょっと見てみます。ティルテユは岩肌を背中を預けて立っています。ハンマーはそのすぐ横に、ガルルガフェイクは片手で抱えています。

でもさすがは歴戦のハンターさんですよ。その厳しい眼光はさすがです。飛竜さんがいなくても、その闘志はちっとも陰りを見せません。

でもどうしてでしょう。ティルテュの眼差しはアマランサスから片時も離れようとしません。

大型モンスターが複数出現する場合は別々の区画に引き離して狩猟を行うことが常套である。よって、合流された場合は一旦身を引き、二頭が離れるのを待つべきである。

まったくもってアマランサスの判断は正しい。

しかし、マタタビ片手に猫と戯れていることに何の意味があるだろうか。そう、先ほどから睨み続けているが、アマランサスはまったく意に介した様子はない。

時折こちらに顔を向けては、大きな瞳をさらに大きくして見ているだけである。

別に猫と戯れるなど言うつもりはないが、緊張感を途切れさせることについては反対だ。

一言かけてこようと決めて、ハンマーは置き去りに歩き出す。

その途端に、邪魔が入った。

獣人種アイルーとメラルーが甲高い鳴き声とともにティルテュよりも先にアマランサスの元へと駆け寄ったのである。

数は四匹。アイルーとメラルーが半々だ。その内の二匹は大きな

赤いタルを頭上に担いでいた。残りの二匹の手には袋が握られている。

大タルと、おそらくは爆薬である。

どこその間抜けなハンターが盗まれたものだろう。アイルーはともかく、メラルーは手癖が悪く狩り場ではよくハンターの持ち物に手を出す。

そうして奪ったものを自分たちの集落に持ち帰るのだそうだが、それがここなのだろう。

アマランサスの前に大タルと爆薬が並べられた。何とも危険な香りのする組み合わせである。

笑顔のメイドはゆっくり立ち上がると、運んできた猫たちにそれぞれマタバビを手渡した。それからすぐに大タルの方へと向き直った。アマランサスの周りではほろ酔い加減になった猫がマタバビを手に遊んでいた。しかし、中にはアマランサスの横へ立つアイルーがいる。

数は二匹。どこかその顔つきは精悍とさえ思えた。

アマランサスが大タルの蓋を外す。すると左側のアイルーが蓋を受け取り、右側のアイルーが爆薬と、続いて紐を手渡した。

大タル爆弾を作るには爆薬を内部に固定する必要がある。そのための紐なのだろう。

言葉など発していない。そんな阿云の呼吸でアイルーは動き、ア

マランサスは真剣な様子である。

大タルの中に手を入れ、何やら作業をしている。作業時間自体は1分とかかかっていない。それでもアマランサスが大タルから手を引き、アイルーが蓋を閉める。同じ作業と動作をもう一つのタルでも行った。

これで、大タル爆弾が二つ完成したようだ。

だが、これで終わりではなかった。アマランサスはアイテム・ポーチから化粧道具を取り出した、わけではない。アマランサスが取り出したのは緑色をした小箱である。

トラップツール。その名の通り、シビレ罨や落とし穴の作成に用いられる工作道具である。ただし、精密な作業に向くため、罨以外の用途もあると聞く。

テイルテュにはアマランサスの狙いが今になってようやくわかった。以前アマランサスは桜火竜から火炎袋を剥いでいた。目の前には大タル爆弾がある。

間違いない。アマランサスが作るうとしているのは大タル爆弾G。

現在考えられる爆弾の中で最大級の火力を誇るものだ。爆薬に加え、火竜の息吹の源となる火炎袋まで仕込むのだ。それで破壊力が出ない方がおかしい。

ただ、どうしてもわからないことがある。大タル爆弾は人の胴体ほどの大きさがある。しかし、大タル爆弾Gは人の背の高さほどもある。大タル爆弾に火炎袋を詰め込むだけでどうしてタルの大きさ

まで変わるのか、それが常々疑問であった。

ハンターをはじめてからどうしてもわからない七つのことの一つが、今白日の下にさらされようとしている。

そうティルテュは目を見開いてアマランスと猫たちの作業を注視する。アマランスの手が、大タル爆弾へと差し込まれた。そして、ティルテュの視界が黒く覆われた。

何が起きたのかわかっている。視界が塞がれる寸前に、マタタビに酔ったメラルーが飛びついて来たことは見えていた。

メラルーはよりもよって顔に張り付いて離れようとしなない。引き剥がそうにも片手は兜で塞がれている。髪を掴まれているため、強引に引き離そうとしても頭皮を痛めるだけである。

「は、離れんか!？」。

猫の猫なで声を耳ともで聞かされる。酔っ払いが性質が悪いことはモンスターも人間も共通するようだ。

ようやく引き離すことができた。メラルーはティルテュの掌の上で背中を大きく反り返らせて、こともあろうに寝ていた。マタタビでも酒と同じように酔いつぶれるものなのだろうか。

と、そんなことに関心を寄せている場合ではなかった。

大タル爆弾がどうして大タル爆弾Gに加工される際、大きさまで変化するのか、その真意を見極めなくてはならない。

ティルテュは目を見開いて、勢いよく首を上げる。

アマランサスは、大タル爆弾は、すでにその作業を終えていた。やはり人の背丈ほどもある大タル爆弾Gが二つ並んでいる。その周りではアマランサスとアイルー、メラルーたちが飛び跳ねて完成を喜び合っていた。

第八話「紅衣の女中と黒白の猫さん」（後書き）

アイルーとメラルー。私個人としても思い出の多いモンスターです。

アイルーの爆弾に吹き飛ばされた後、大型モンスターに轢かれま
した。

メラルーには調査書³を盗まれました。

大型モンスターがいるときはとりあえずアイルーは叩き潰してお
きます。肉球のスタンプ目当てにメラルーは進んで追いかけます。

皆さんにもこんな思い出、ありませんか？

第九話「紅衣の女中と最後の死闘」(前書き)

大して長い話でもないのに時間をかけて投稿してきましたメイドさんも、残すところ@1話。この、あとを@と表現する方法もモンスターハンターフロンティアで覚えました。

ところが、ヴァージョンが8.0になったことでついに私のPCのスペックを超過。オンボードのグラフィックカードではもう広場に入ることさえできません。

猟団の皆さんは元気に行っているでしょうか。小説書いてますと言っても、誰も読んでくれませんでしたけど、そのことさえ除けば寂しいものです。

第九話「紅衣の女中と最後の死闘」

人はモンスターほど強くは決してなく、賢くとも高が知れている。

少なくともティルテュには目の前の事実を受け入れるだけの強さもなければ、表現するための言葉も知らない。ティルテュは固い岩盤に座り込んでいる。防具は動きやすさを考慮したつくりになっているため、胡坐をかくこともできた。

兜は膝に置き、手で自分の顔を力強く覆い隠す。目の前の事実を懸命に否定するティルテュの耳には猫の喜ぶ声が届いている。それは一匹や二匹ではない。何匹もの声が重なり合い喜びを謳歌しているのだ。

その中には若い女の声も混じっている。

「やりました〜！」

わかっている。これはアマランサスの声だ。猫はアイルーとメラルー。こいつらが何を喜んでいるのかも何もかも、ティルテュにはわかってしまっている。

観念しよう。だが、認めない、否定する、拒絶しなくてはならない。目の前で起きたすべてのことを。

ティルテュは顔から手をずらし、ゆっくりとまぶたを開く。

すると、月明かりが世界にうつすらと色を乗せる。そこには漆黒の巨体がひれ伏していた。あれほど強靱に思えた脚はだらしなく投

げ出されている。地を裂く翼は破けた翼膜がまるで綻びた衣のよう。角竜の象徴たる角をへし折られ、その顔は爆発にさらされ、いまだに火が燻っている。

ディアブロス亜種。黒衣の女帝が命と動きを失っていた。

獣人族たちが勝利の踊りに興じている。両手を上げて左右に飛び跳ねる。その音頭はディアブロス亜種の背に上った一匹のアイルーがとっている。

さて、こんなことを言っただけに信じてもらえるだろう。アマランサスに扇動されたアイルーどもが爆弾を放り投げ、メラルーどもは先が鉤状になった棒でディアブロスに殺到した。その止めをアマランサス特製のタール爆弾Gの大爆発が成し遂げた。

仲間のハンター連中に言えばいい笑いものだ。実際この目にしておきながら自分でも信じきれていない。

「墓場まで持っていくことになりそうだな……」

こうつぶやいて、ティルテュは今一度手で顔を塞いだ。

ティルテュはネコさんが嫌いなんですか。せつかく一緒に狩ることができたのに、一緒に喜んでくれませんでした。

でも仕方ありませんよね。まだまだ狩りは続きます。だって、ディアブロス亜種さんは2頭いるんですもの。一人いなくなっても、残された人は元気いっぱいです。残されるのはいつも女性ですけど、

でもそんな時強いのも女性ですよね。

まだまだ喜ぶのは早いんだって、きつとティルテュはそう考えていたんですよ。

私たちハンターはクエストを受けるといつも時間が設定されます。そうしないと引き際を見極められないし、これくらい時間をかけても狩れないほど力不足なら、機を改めて欲しいって言うことなんですよ。

メイインターゲットが一頭でも、そうでなくてもそれは同じです。

この「死神」の場合だと、日没から夜明けまで。撤収の時間を含めても八時間と二〇分くらいで狩ってくださいって言われています。でも、もう三時間以上経ってしまいました。

頑張らないといけません。

しっかりとディアブロスさんを2頭とも狩らないとギルドさんから強制的に撤収させてちゃいます。ひどいですよね。

でも、ギルドさんは生態系や生息頭数の管理をしてくれてますから、ハンターが言うことを聞かないわけにはいきませんよね。

だから頑張りましょう、ティルテュ。

第二区画というものをご存知だろうか。この地区のベースキャンブから細い山道を下った先に広がる広大な砂漠を示す言葉だ。

なぜホームベースから行ってはじめて訪れる場所が第一でないのか、ティルテュは幾度となくこう不満を感じていた。それは特に、この区画で苦戦している苛立ちをぶつける時によく感じる。

早い話が、ティルテュは苦しい戦いを強いられているのである。

砂が割れ、堅牢な二本の角が天へと向けて飛び出す。そこはティルテュがつい先ほどまで立っていた場所である。

ディアブロスはその尻尾を左右に大きく振りかざし、ティルテュの接近を拒んだ。ハンマーのように相手に密接して攻撃を繰り返す武器は尻尾のように細かく動き、しかも高い位置にある部位を攻撃することには向いていない。

おまけに最も力を乗せることのできる三連撃は一定の時間を必要とし、相手にすばやく接近する必要がある。

アマランサスが狙撃する。その一撃を浴びながらもディアブロスはティルテュの方へとその口から漏れる黒煙を見せ付けるように振りかえる。

完全に頭に血が上った状態だ。これでは音爆弾も効果がなく、しかも動きが早い。ティルテュは相手の腹下にもぐりこもると走っていたが、思いのほか早い旋回が早い。なんとも巨大な顔の前で睨みあう格好となる。

ディアブロスはティルテュへと目掛けて、結果として角を叩きつける動作に入る。それは再び潜行しようと砂に角を突き刺す動作ではない。ティルテュは相手に近すぎる位置にいたため、太い角が

体をかすめた。

直接の攻撃ではないため傷を負うほどの痛みはない。それでも目の前でディアブロスの巨大な体が砂に潜っていく迫力に、つい横へと転がる。

別にディアブロスの潜行に巻き込まれて地中に没してしまったハンターの話聞いたことがあったわけではないが、理屈ばかりで片付けられるものではない。

砂を巻き上げて地中へと逃れたディアブロス。本来開くべき巨大な穴は、周囲から流入する砂が埋めてしまい元の砂地に戻る。穴が開いたとは思えないほど元通りになる。やはり、ディアブロスの掘った穴にはまったハンターの話も聞かない。

地中からの急襲に天よりも高く跳ね飛ばされたという話なら、枚拳に暇がない。

ティルテュは急いでその場を離れた。地中の角竜を攻撃する術はなく、ハンターのできることは逃げ回ることくらいなものだ。

律儀なディアブロス亜種はティルテュが先ほどまで立っていた位置を正確に刺し貫いて、砂中からその姿を砂漠の風の中へと放り出した。すぐさま頑強な尻尾が振り回され、これでは近づくことができない。

戦いが始まってからこの繰り返しである。一頭目のディアブロスはそんなに潜行を多用しなかったが、こいつはずいぶん潜りたがる。その度に攻撃が中断されてしまい、非効率この上ない。

アマランサスが射撃を繰り返してはくれているが、これには二つの問題がある。攻撃力がやはり足りていないこと。そして、あまり攻撃しすぎるとモンスターがガンナーに目をつけてしまうことだ。

あまりメイドに頼ってばかりもいられない。

ティルテュはアイテム・ポーチから閃光玉を取りだした。1頭目にも使用している他、閃光玉の持ち込みはギルドによって制限されているため、これを外すのは手痛い。

何でも、閃光玉は巨大なモンスターの視覚さえ塗りつぶしてしまうほど強力なものであるため、乱用してはその地区の小さな生物に影響を与えすぎると懸念されているのだそうだ。そのため、持ち込めるのは五個まで。

ただし、閃光玉の材料となる光蟲と素材玉を別個に持ち込んで現地調査するという抜け道も存在する。残念ながら、これにはもう一つただしという接続詞がついてしまう。

ただし、不器用を自認するティルテュが調合アイテムなど持ち込んでるはずもない。

よって、これを外せば残りは一発のみ。

ディアブロスがティルテュへと向き直ろうとする。その動きに合わせて閃光玉を放り投げた。

さしものディアブロスとて、視界を塞がれた状況で潜行はしない。閃光で潜行を防ぐとは、我ながら洒落がきいている。

そう内心ほくそ笑むティルテュの目の前で、閃光が爆ぜた。そして、響くのは砂が掻き分けられる力強い音。

閃光に文字通り目を向けることなく、ディアブロス亜種は地中へとその巨体を消していった。

それからしばらくしても、ディアブロスが飛び出してくる気配はない。どうやら、別の区画に移動してしまったらしい。閃光玉を放り投げた格好のまま、妙な気恥ずかしさに身動き一つとれずにいるティルテュを残して。

どうしてでしょう。ティルテュがご機嫌ななめです。

ディアブロスさんがお砂遊びばかりして、相手をしてくれなかったからでしょうか。まさか閃光と潜行をかけた寒い駄洒落と閃光玉が両方とも不発だったからじゃありませんよね。

聞いてみようにも、ティルテュは砂漠を大股でどんどん歩いてます。なかなかお話に乗ってくれません。

いい機会ですので、今の内にホット・ドリンクを飲んでおきます。そろそろ体が冷えてきましたから。アイテム・ポーチから瓶を取り出して、赤い液体を一気に口に含みます。とても辛くて、苦くて、とても飲めたものじゃありません。

けど、メイドさんはいつも笑顔が基本です。嫌な顔なんて見せずに飲み込みましょう。

ガンナーってスタミナがなくてもできそうですけど、実際は瞬発力がものをいうお仕事なんですよ。特にヘビィ・ボウガンは重くて普通に歩くよりも転がった方が早く移動できます。

だから体はしっかり温めておかないとだめです。

ティルテュはディアブロスさんが南の砂漠に移動したと踏んで、オアシスのある一番区画の方に歩いてます。リオレウスさんとディアブロスさんから造った装備をかき鳴らして、まさに意気軒昂って感じですよ。

アマランサスも急がないといけません。

走っちゃいましょう。そう考えましたのに、いきなりお腹が痛くなって、つい膝を砂についてしまいました。額を汗が流れるのは、きっとホット・ドリンクのせいですよ。

先をどんどん歩いて行くティルテュは、アマランサスがお腹痛いこと気づいてません。

今は大切な狩りの最中です。余計な心配かけたらだめですよ。

ディアブロス亜種を完全に見失ってしまった。砂漠は一通り歩いて見たが、広大な砂漠の前ではいくらモンスターが巨大とは言っても、まさに砂に落ちた針を探すようなものだ。

ちなみに、これは洒落ではない。そう、ティルテュは勝手に自分に言い聞かせた。

「こう言う時は行き違いを避けるために待ち伏せも有効な戦略になる。正真正銘の一番区画で、ティルテュは腰を下ろした。」

ここにはオアシスがあり、小さな池に水が満ち、その周りにうっすらと雑草が生えている。この緑の絨毯は座るのにちょうどいい。種類など知るよしもないが、太い幹の天辺にだけ葉をもつ樹木は、昼なら日よけに使えることだろう。

ヘルメットは脱がないまでも、ハンマーをその木へと立てかけておいた。

アマランサスはティルテュの隣りに座りながら、しかしへビィ・ポウガンを担いだままである。油断ないのか横着なのか、おそらくは後者だ。

別にそこまで警戒する必要はない。今ディアブロスが2頭でこの地区を縄張りになっていたこともあったせいか、他の生き物の姿がほとんどない。

ティルテュは両足を前に投げ出した無防備な姿勢で座っていた。アマランサスは池に背を向け、砂漠の様子をうかがっている。ここは岩場に囲まれた場所で、警戒すべき範囲は狭い。ディアブロスが来たらずくにでもわかるというのに、このメイドはおかしなところで律儀なものだ。

だが、ティルテュとて、この狩りを楽観視しているわけでもない。一頭目にアイテムをほとんど使い切り、時間もすでに六時間が経過している。ギルドが設定した制限時間まで、決して余裕があるわけではない。

同時に、諦めるつもりにもなれない。ここで諦めてしまったら、もう、父の痕跡を探す術がなくなってしまう。

「お父様のこと、何かわかるといいですね」

思わず、ヘルメットごと首を回した。アマランサスはやはり、いつも通りの張り付いた笑顔で砂漠を眺めている。

メイドは、鋭いようで鈍く、鈍いようで鋭い。いちいち判断することはやめてしまおう。アマランサスを理解しようとする試みは徒労であると思えない。

「そうだな……。私は、決して孝行娘ではなかった。ハンターになったのも父へのあてつけのようなものだった。村にだってまともに帰っていない」

それは家族を省みない父への反発だった。そのことは理解しながらも、感情を抑える理由にはならなかった。

父は最後までハンターになることを認めようとはしなかった。しかし、家を出るときに骨でできたハンマーを餞別にくれたのも父である。

父は一体何を考えていたのか、ティルテュは聞けずじまいでいる。そして、二度と聞くことはできないだろう。ティルテュも子どもではない。父が生きているとは微塵も考えていない。砂漠は人が一人で生きていくにはあまりに過酷な環境である。

「父は生きていないだろう。形見だってみつけてやれるかわからな

い。そもそも、ディアブロス亜種の巢に父が入ったということ自体私の推測だ」

近くにあった石を拾い上げると、池目掛けて放り込んだ。堪え性のない石はあっさりと水中に没した。これは、狩りがすんなりと成功することの予兆であると勝手に判断しておこう。

アマランサスが前触れなく立ち上がった。何をするのかと思えば、石を池へと放り込んだ。石は鋭い角度で水面にぶつかったため、二度、三度と、四度、五度と池を跳ねると、ようやく、水の中に落ちた。これは、まだ五回くらい障害が残されていると判断すべきだろうか。

「でも、ティルテュは信じてるんでしょ、お父様のこと」

さあな。こんな、気のない返事をした。

自分でもよくわかっていない。ただ、焦燥感があった。

何かをしなくてはならない。しかしそれは、父の生存を信じ、いじらしく待ち続けることではない。父の功績を証明しようと奮起しているわけでもない。

ティルテュはハンターだ。そして、ハンターはモンスターを狩る。

「復讐だとほざくようなロマンチストにハンターは務まらない。だが、クエストとして、ディアブロスを狩ることは認められている。このクエストをすれば、一応父を探したということになるし、何も見つけられなくても、義理立てくらい、したことになるだろ」

自分はそこまで深刻ぶっていない。そう示したくて、アマランサスの側の手をいい加減な様子で降って見せた。

だから今季で父を探すことはやめようと考えている。今の段階でさえ、痕跡を見つけることは難しいだろう。時間がたてばなおさらだ。

こんなことを話しても仕方がないとは思ったが、アマランサスは思いのほか静かに聞いてくれていた。このメイドも騒ぐべき時とそうでない時の区別くらいできるらしい。

そう考えた矢先、振っていた手をアマランサスが掴んだ。相変わらず、防具の上からでもわかる力強さである。

「頑張りましょ、テイルテュ！」

こういつまでも握られていては面倒だ。仕切りなおしの意味で立ち上がるうとすると、アマランサスの手はあっさり離れた。それでも一度動き出してしまったので、そのまま立ち上がる。少々、体が揺れた。

立ちくらみか。

いや、違う。

テイルテュは急いでハンマーに手を伸ばした。木に預けていた柄を掴み、構えると、砂が勢いよく飛び上がった。

これまで何度見てきただろう。

ディアブロス亜種がその咆哮とともに飛び上がり、双角を空にさらすその姿を。

モンスターは生きている。

それは名誉だとか誇りだとか、そんな人間独自の価値観によることは一切ない。

嗜虐心だとか残忍さだとか、そんな物差しで計ることのできるものでもない。

彼らは単純である。目的は食べること、寝ること、そして増えること。

食べるために肉食性のモンスターは命を、それこそ少しの寸毫の躊躇も、微塵の罪の意識もなく奪う。そもそも罪とは、社会性を持つ種であるヒトが、その効率的な運用を助けるための知恵から見出された概念でしかない。

休む。それは生きるために必要なことであり、モンスターはあくまでも生きるということに貪欲である。そしてこれは戦いに備えるためでもある。

そして子孫を増やすこと。これは全生命に与えられた至上の使命にして命題。生きるということは増えることであり、増えるということとは生きるということ。それは、ヒトもモンスターも変わらない。

モンスターの戦いは、この三大欲求にすべて起因する。

喰らうためにモンスターがモンスターを襲う。襲うモンスターは必死に追い、襲われたモンスターは必死に逃げる。ただそれだけのこと。そこに怨嗟や憤怒の介在する余地はない。

安全な場所を確保するため、モンスターは縄張りを作り出す。捕食者はそこを守り、他の捕食者は立ち入らない。立ち入る時は侵略食物連鎖の頂点に立つもの同士が互いの力を比べあう。それでも、こんなことは稀である。

モンスターは子どものためにその命をかける。自身が懸命に生きた証を、それを更なる未来へと伝えてくれる存在を守る。

そして、モンスターはひどく臆病な生き物である。飛竜はその勇猛さで知られるが、決して無理な狩りをしない。ここで傷を負えば、次の狩りを行えなくなる。だから鋭い爪も、鋭利な牙も持たない草食種を付けねらう。

飛竜同士が戦うことはまずない。あるとすれば縄張り争いか、雌を巡る雄の争い。

ただどちらも、死が結着となることは少ない。

大型種同士の戦いはあまりに危険である。たとえ勝利しても大きな怪我を負ってしまうかもしれない。それを避けるためにも、モンスターは表面的な力比べでお茶を濁す。

イヤンクツクの縄張りにリオウスが現れば、互いが大きさを誇示し合う様に翼を広げ、やがてイヤンクツクがか細い鳴き声とともに飛び去ってしまうことだろう。

ディアブロス同士が角をこすり合わせて、その大きさを比べている風景は時折目撃されている。どちらがより優れた角を持ち、より子孫を残すに足る存在であるかを比べあう。

ここで相手を殺してしまうことに何の意味もない。

殺しても食べられるわけではない。殺しても傷ついてしまえば休むどころではない。殺してもそれは同種の数を減らしてしまうという意味において正反対の結果をもたらしてしまう。

ヒトは違う。喰わずともヒトを殺す。欲しければヒトを殺す。自身の仔さえ、殺す。

自然の中で、ヒトは特別でなくとも特殊。そして例外。

モンスターがその命尽きるまで戦うことがある。それは、例外たるヒトのために。

モンスターは知っている。ヒトは食物連鎖のさらなる上位種であることを。そして覚えている。ハンターの武器の匂いがしたのなら、それから何が行われるのかということ。

ハンターから逃れることはできない。彼らは目的を果たすまで何度でも現れる。その度に、嫌な臭いを撒き散らしながら。

だからモンスターは命をかけて戦う。打ち破るほか、生き延びることはできないと知っているから。

ディアブロス亜種は美しい。そのひたむきな母性と生存本能を黒衣の礼装で隠し、暴威と破壊という最上の礼でもって迎え撃つ。

父への思いを確かめながら巨塊を振るう褐色の狩人を。

笑う。そんな人だけが持ちえる親愛の表現を手放すことのない砲撃の侍女を。

天上で輝く月が、これまで幾度となく眺めてきたであろう命の結末を、今一度目撃せんと砂漠の夜を照らし続けていた。

第九話「紅衣の女中と最後の死闘」(後書き)

ふと、なろうにおけるモンスターの生態調査なんてものしてみました。そしたら、シエンガオレンやディアブロス亜種って、結構レアなモンスターだと判明。

ただ、それだけです。

今度モンハン小説を書くことがあったら、何か珍しいモンスターを使った上で、またクエストを独自解釈したものを書いてみたいですね。

もっとも、先にメイドさんを完結させる必要がありますね。

最終話「紅衣の女中と追憶の王墓」(前書き)

これで最終話になります。

はじめは6・0ではじめたはずが、終わる頃には8・0にヴァー
ジョン・アップしています。私のPCの性能では広場にさえ入るこ
とができなくなりました。

最終話「紅衣の女中と追憶の王墓」

雄たけびとともに、ティルテュはその手に堅持されるハンマーを叩き付けた。黒狼鳥のクチバシを加工して得られたハンマーが空を斬る音は、イヤンガルガの咆哮をそのまま連想させる。特定の縄張りを持たず、絶えず移動を繰り返しているため他の大型種と争い続けるとされるイヤンガルガの強固なクチバシがディアブロス亜種の黒い角を打ち付ける。

叩くというよりは突く。鋭いクチバシを有するハンマーはねじれた角に突き刺さると、その一点から亀裂が横に走る。裂溝が角を取り巻いたところで、近くで見ると岩としか思えない剛角は、それこそ岩石のように砕けて折れた。

ディアブロス亜種が咆哮とは比べ物にならないくらい細かい悲鳴をあげて後ずさる。

ティルテュに、この隙を見逃してやれるほどの余裕はなかった。打撃を加えた姿勢からすぐに前転してディアブロスの腹下へと潜り込むと、件の三連撃を叩き込む。柔らかい腹に打撃が食い込む感触は、まさに手応えありと言った快感である。

ディアブロス亜種は痛みには堪えかね、跳び上がるように後ろへ引っ張られた。

そこへ、アマランススが放った弾丸が首へと突き刺さる。かと思つと、弾は首から腹へ、尻尾へ抜ける経路で漆黒の体皮を裂きながら通り抜けた。柔らかく目標の体に沿うように突き進む貫通弾特有の弾道である。

どうやらテイルテュも、そしてディアブロスもまた、ここ一番区画を決戦の地と決めているらしい。

手には痺れが生じ始めている。あれほど固い甲殻を幾度も殴りつけたのだ。疲れもする。

そして、体は芯から冷え始めていた。瞬く間に体温を奪う冷気の中をすでに七時間以上戦い続けている。ホット・ドリンクと防具の内側に縫いこまれた保温材があつたとしても、そんなものは所詮その場しのぎの小道具に過ぎない。

クエストに制限時間が設定されている理由の一つはあまりに過酷な自然環境が上げられる。人は結局弱いのだ。武具で身を固めて、アイテムで誤魔化したところで、人が立ち入るにはあまりに自然は過酷である。

そう、時間はもはや残されていない。ここで決着をつけねばならない。

アマランサスはアイテム・ポーチから三発の弾丸を取り出した。内部が空洞になった丈夫なカラ骨の中に、強い衝撃を与えると破裂し、炸裂する、通称「竜の爪」と呼ばれる特殊火薬を詰め込んだ弾丸である。

拡散弾LV2。

そのあまりに高い攻撃力から、ギルドより携帯可能な弾数がわず

か三発に限定されている。調合素材を持ち込み、現地で調合するという抜け道こそ存在するが、大タル爆弾、毒弾LV2のための素材を持ち込んだだけで手一杯であった。

よって、放つことができるのは三発のみ。

三発のみだからこそ、アマランサスは必殺の覚悟でカホウ「狼」に拡散弾を装填する。チャンバーを開き、まずは一発を放り込む。備え付けられたレバーを引くと、弾丸が銃身へと送り込まれる。

アマランサスの吐き出す吐息は白く、冷気は肌を刺す。

夜と風を抜けた先で、片角の竜が黒い吐息を吐きながら猛る。

メイドは笑わない。その眼差しはディアブロス亜種の黒く、広く盛り上がった背を貫く。引き金が引かれる。瞳と指。両者はただ命を失う。

主の勝利とかの者の死を。

拡散弾が銃口から飛び出た途端、頬を叩かれた大気が大声で泣き出した。生じた反動がアマランサスの体を大きく後退させる。

飛翔する拡散弾はディアブロス亜種の山のように盛り上がった背中に衝突すると、カラ骨がまずは砕けた。そして、いくつかに小分けにされていた竜の爪が、背中、翼、その首へと降り注いだ。

それは、それぞれが小規模ながら、爆発する。

ディアブロス亜種は背中に突如発生した衝撃に、バランスを崩し

て首をしたへと下げた。そこにはティルテュがハンマーを構えている。イヤンガルガのクチバシによる三連打。幾度となく打たれた甲殻がひび割れ、弱い皮膚の部分から零れ落ちた血液が砂漠の砂を固まらせる。

次弾装填。

手際よく完成された動作で、さらなる拡散弾が業火と爆発をディアブロスに背負わせる。刺しているのか叩いているのか。その区別など豪快に一まとめにした一撃がディアブロスを叩き上げる。

アマランサスは最後の拡散弾を装填し、発射する。

ティルテュはこれまで幾度となく繰り返した攻撃を、ただ繰り返す。

火と血。

もはやヘビィボウガンに弾は装填されていない。それでも、アマランサスは銃を構え続けた。

腕の痺れは限界が近い。それでも、ティルテュはハンマーを手放さない。

ディアブロス亜種が断末魔の悲鳴を夜空へ捧げながら、砂の棺にその身を横たえるその時まで。

時間が流れた。断末魔の叫びが止み、倒れたディアブロスはもう二度と立ち上がることはなかった。

アマランサスは顔に笑顔を戻して、後ろへと座り込んだ。ハンマーを取り落としたのはティルテュである。両手を膝にあて、疲労を全身で表現していた。

どちらも、ハンターが決して見せない仕草である。

そう、狩りは終わったのだ。

砂でできた坂道を、滑り台の要領で降りる。柔らかい砂がほどよい速度で、ティルテュとアマランサスを広間へと到達させた。

広大な空間である。小さな村なら入ってしまいそうな広さで、地面は砂の他、角張った石材が頭を覗かせている。

ティルテュがほんの少し中央へと向かって歩くだけで、それを見つけることができた。

「ディアブロスの巣か……」

砂地に掘られた円形の窪地で、鳥の巣と似たところがある。もともと、その大きさは比べるべくもない。広間が村なら、巣には人家がすっぽりと入ってしまう。

それが二つ、隣り合って並んでいた。

巣を覗き込んでみると、割れた卵の欠片が散乱している。しかし、幼竜の姿はない。すでに巣立った後らしい。どうやら、後味の悪い思いはしないですんだようだ。

父のメモによると、ディアブ羅斯は縄張り意識が大変強く、同じ場所に巣を作ることはないらしい。双子の角竜が例外なのだ。ここは父の顔を立てることにしよう。

ここに他のディアブ羅斯はいないと判断して、ティルテュは兜を脱いだ。小脇に抱えると、その途端、すぐ横に発生した不審な物音に、兜を取り落としてまでハンマーの柄に手を伸ばした。

振り向き、身構える。

すると、そこにモンスターの姿はない。あるのは、子どもが作ったような砂山が一つ。

ティルテュの目の前で、上から落ちてきた砂の雫が砂山の上に一筋に落ちた。見上げる。すると、天井の岩盤の隙間から砂が水のようこの広間へと降り注いでいた。

ここばかりではない。見渡すと、いくつもの天井から砂が降っている。これではいくら広間が広いと言えども、温暖期を待つまでもなく埋もれてしまうことだろう。

やはり、父の判断、観察、推察は正しかった。

落としてしまった兜を拾い上げる。被ってしまった砂を払っていると、離れた場所でアマランサスが手を振っている。

「ティルテュ、こっちこっち！」

何かを見つけたらしい。まさか父の痕跡でも見つかったのかと、

ティルテュは駆け足で急いだ。

アマランサスはティルテュが近くにまで来たとみると、視線で地面の一箇所を示す。

そこには、砂で半分も埋もれた、何かの残骸が残されていた。屈んで、兜を脇に置く。直接触れてしまうと壊れてしまいそうなそれを、砂をかき出して少しずつ明らかにしていく。

それは、ずいぶんと古ぼけた双眼鏡だった。首掛け紐を掴んで持ち上げてみると、それは追憶を促してくる。

幼い頃のティルテュはいつも父が首から掛けた双眼鏡ばかり見ていた。目線が一致していて、そして、父への反感から顔を見上げようとはしなかった。

その時いつも見ていた双眼鏡には何かのモンスターの歯型が刻まれていた。同じ傷が、今ティルテュが手にしている双眼鏡にも深く掘られていた。

父は、ここにまで来たのだ。

家族をないがしろにして、心配ばかりかけて。

「母さんはいつも泣いていたんだぞ！」

双眼鏡を、つい取り落とした。砂のはじける、そんな小さな音さえ、今は腹立たしい。

「あんたは一体、何をしたかったんだ!？」

双眼鏡を睨みつけて、罵倒してやる。父の遺品を見つけてやった義理堅い娘として、これくらいの特権は与えられてもいいだろう。

「満足か！？ 自分の好きなことをして身勝手に死んで！ これで満足か！？」

砂に手を叩きつけると、砂が舞い上がり、双眼鏡が小さな音を立てる。

「あんたは、何がしたかったんだ……？」

「きつと、これが見たかったんですよ！」

また、アマランサスが何かを言っている。ただ、おかしなメイドを見ようと顔を上げたただけだった。

すると、目の前に世界が広がった。

広間の壁は、それこそ朽ち果て、ところどころが欠け落ちている。自然にできた岩盤にも思っていたそれは、ここから見たなら遺跡の壁であり、壁画が刻まれていることがよくわかる。

見たこともないレリーフの怪物に武器を持って挑む人の姿が描かれている。その怪物は翼を持ちながら四肢を持ち、その周囲に描かれた曲線模様はおそらく風を表現しているのだろう。

反対側には同じく翼と腕を持つ怪物と、やはり戦う人の姿。こちらに描かれた丸い模様は炎のようにも見える。

それぞれの壁画を縦に隔てている帯状の文様は河。父が言っていたのだ。このセクメーア砂漠は、かつて肥沃な大地であったのだと。広大な湖を持ち、その周りにはぐくまれたオアシスの頼りに文明が栄えたのだと。

壁画の構図は左端に風の怪物、右端には炎の怪物。そして、河で隔てられた中央には青々とした草木が描かれ、その中央には城壁をもつ城が描かれている。

亡国の営みが息吹さえ伴って見えてくるようだ。

壁画の大きさを示すようにアマランサスが手を大きく広げているが、このメイドが一〇〇人いても壁画の大きさを示すことはできない。

ティルテュは歩いた。壁画をより近い位置で見るために。

近づけば近づいただけ、壁画は劣化が著しい。ところどころに穴が開き、特に中央の城のレリーフがある部分は大きく剥がれ落ちていた。城の上の部分、恐らく空が描かれている場所であるのだろう。開いてしまった穴の上には、雲を模したと思しき模様が見える。

この雲は唯一赤い顔料が塗られていて、ひどく不思議な雰囲気である。これは雲ではなくて、別の何かではないか。

もちろん、何か確信があるわけではない。ただ何となく、そう感じた。

果たして、本来ここには何が描かれていたのだろう。もはや見る術がないことが、残念でならない。

「これは……、一体何だ？」

アマランサスはいつの間にかティルテュの傍にいた。何のことはない。ただ壁画の見やすい位置に二人が自然と集まっただけのことだ。

正直な話、アマランサスがここのことを知っているとは思っていないが、それでも、このメイドは妙なところで博識である。

やはりアマランサスは微笑んだ。

「歴代王家のお墓ですよ。ほら、あそこにも」

そう、アマランサスが指差した先は壁画の一角である。壁画が剥がれ落ちていて、すると、壁に何かが埋め込まれていることがわかる。

ふと思いついた単語は棺であり、それは間違いなく石棺であった。棺にも立派な彫刻が刻まれているが、すでに損傷が激しく、内部が露出するほど欠け落ちている。

棺の中は距離があるせいもあってはつきりとは見えない。何か、布のようなものが、わずかな風に揺れているように見えているだけである。

それが、棺に開いた穴をすりと通り抜け、その褐色の布地を宙にさらした。そのまま、ティルテュの元へと落ちてくる。

ティルテュは咄嗟に手を伸ばし、布を高らかに掴み取った。

遺骸を包んでいたその布は、外套にでもできるほどの大きさがある。綻び、ところどころに擦り切れて開いた穴が裂けている。元の色と思われる黒と、劣化した褐色とが模様を描き、何とも「禍々しい布」であった。

獵団テント。獵団に属する者が、マイルームとは別に仲間たちと集まるための場所である。むき出しの地面がまだこの獵団の規模が決して大きくないことを示している。

しかし、同形のテーブルがいくつも置かれ、休む場所は存在している。そして、集った者の中に、そんな些事に気をもむ者はいない。

木で設えたテーブルに腰掛けるのは三人。長方形のテーブルで、対面式に長椅子が置かれている。一組の男女が左とすれば、もう一人は右に。テーブルの上には一枚の紙が広げられていた。

メイド服を着て、いつも微笑みを絶やさないアマランススの隣りには男が座っている。蒼い火竜の鎧を身につけた白髪の男は、まるで獲物でも見るような鋭い目つきを紙に飛ばしている。

「これが壁画か」

紙面に描かれているのはデッサン画。風纏う龍と炎操る龍を迎え撃つ砂漠の王国が描かれている。欠損具合まで丁寧に際限されているため、王国の上部が大きく欠けてしまっている様もはっきりとわかる。

アマランサスは指を伸ばして、それぞれ未知の怪物を差す。

「きつとクシャルダオラ、それにテオ・テスカトルですよ、アレ
ス」

アレス。そう呼ばれた男は右目にまで至る深い傷を追いながらも、その双眸はしっかりと図面の中央を捉えている。

「しかし、中央部分が欠けてしまっている。これでは不完全だな」

空白部分。しかし、亀裂の端には、まるで爪のような、いや、爪
とは思えない模様がわずかながら残されている。2つの仮定を用
意しよう。

1つは、これはモンスターの爪であること。続いて、すぐ下に見
えている城とスケールが同じであるとする。すると、当方もない大
きさの怪物を、この亀裂は飲み込んでいることになる。

だが、これは仮定が多く、推測でさえない。

アマランサスとアレスの向かい側。2人がけの長椅子の真ん中に
脚を組んで女性が座っている。インナー同然の格好をしており、左
手を包帯で首につけている。その顔は筋肉に妙な緊張を見せて引き
つっていた。

「シエンガオレン押しつけてまでした結果がこれか？」

この獵団の主である獵団長フィリアである。その眼差しは怒りで
あり、捉えるのはアマランサス。

当のアマランサスは特に気にした様子もなくテントの入り口を見ている。差し込む日光が影を形作り、特に何の変哲もないシルエットを刻む。

「あ、もうこんな時間、もう行かないと」

胸の前で手を合わせながら、アマランサスが立ち上がる。テーブルの上の図面を丁寧に折りたたむと、エプロンのポケットにしまいかんだ。

「お見送りに行ってきたよ」

メイドは明るく手を振りながらテントを去った。

「夢狩り人」と呼ばれる槍の使い手を残して。

その身を削って街を守った猟団長を置いて。

「これ、あの壁画のデッサンです。お母様にどうぞ」

村へ帰るための馬車を待っていたティルテュに差し出されたのは、一枚の紙切れだった。ずいぶん上等そうな紙で、折られているのに破ける様子もない。

最後の最後まで笑顔をこのメイドは貫きとおすのだろう。ティルテュは紙を受け取ると、軽くあたりを見回した。荷車につながれたアプトノスが退屈そうにあくびをしていた。竜車は何台もこの場所にはあるが、そのどれもすぐに動き出しそうな気配はない。

立ち止まっただけでも、特に邪魔になる様子はなかった。

紙を開く。その際、ちよつとしたコツを必要とした。王墓で手に入れた「禍々しい布」を肩に掛けていたからだ。どうすべきかは悩んだが、アマランサスにそのかさかされて結局持ち出してしまったものだ。これを落とさないように腕を動かす必要があった。

紙にはあの壁画が描かれていた。細部までしつかりと再現され、考古学の資料にも仕えるのではないだろうか。

ティルテュはアマランサスの顔を見た。あまり意味のある行動ではない。どうせ笑っているだけだからだ。ただ、気になったことがある。あの時、王墓でアマランサスがデッサンを残している気配はなかった。だとすると、これだけのものを記憶だけで描ききってしまったということなのだろうか。

このメイドは、やはり不思議な奴である。

理解できない。こつ幾度となく諦めた。しかし、今はよくも悪くも慣れてしまったらしい。このメイドの顔を見ると、こつちも顔の筋肉が緩むような気にさせられる。

「なあ、アマランサス。以前から聞きたかったんだが、どうしてメイド服なんだ？」

アマランサスは微笑みを、やはり止めることはない。

「かわいいからですよ」

答えになっていない。そう、ティルテュは苦笑させられた。

「私は、ティルテュにとって邪魔でしたか？」

すると、声のトーンが変わった。こんな時、アマランサスは思いも寄らないくらい、的を得た話し方をする。短い付き合いだが、わかったこともあるようだ。

「正直、私一人では無理だっただろうな。お前には感謝してる」

二人がかりでさえ、討伐できたのは運ときりぎりの結果であった。はじめは一人でもしてやるつもりだったが、ずいぶんと自信過剰であつたらしい。

アマランサスは、その手をそつと、自分の胸においた。

「私がメイド服を着るのは着たいからです。そんな、自分の好きなことをしても誰かのお役に立てるなら、誰かに迷惑をかけていないなら、好きなことをしてもいいとは思いませんか？」

まさか、父のことを言っているのだろうか。もらったデッサンをポーチにしまいながら、とは言え冗談交じりに返事をするとはできなかつた。少々、言葉に棘が含まれていることを、ティルテュは自覚する。

「父は好き勝手やっていたが、私と母は十分迷惑だったぞ」

再び顔をアマランサスの方へと向けると、メイドは笑っていた。しかしそれは微笑んでいるというよりは微笑であり、物憂げなものを含んでいる。

「お父様のこと、許せませんか？」

まさかアマランサスに余計な心配をかけていたのではないか。そう考えると、すまない気がして、どんな顔をしていいかがわからない。口を閉じて、開く。そんなわけのわからない顔をしてしまった。

どう答えていいものかわからない。考えて、しかし返事はしなくてはならない。

わからん。結局、ため息混じりに言えたことはこんなことだけだった。

家族を省みなかったことは許せない。しかし、そこまでして父が見たかったものを、ティルテュは知った。

壁画は美しかった。失われた王国へと思いを馳せた。

「わからんから、もう少し考えてみるさ」

ティルテュの首には、歯型の刻まれた双眼鏡が掛けられていた。

最終話「紅衣の女中と追憶の王墓」(後書き)

後書きは、一応独立させたものを載せておきます。

言い訳というか、失敗談というか、反省文のようなものになってしまいました。

とりあえず、この作品はこれで完結です。読んでくださった方すべてに感謝の意を表しまして、後書きを終えることとします。

後書き

大して長いお話でもないのに、一〇話と半年をかけたこの作品もついに完結しました。

如何だったでしょう？

個人的には、短い作品にまとめるつもりだから、いろいろ実験してみようと考えた作品でした。

大筋のストーリーには関係しないけど、何か思わせぶりなキャラクターや事件を書き込んでおけば、世界観に深み加わるのではないかと試みました。

結果は、単に余計なものが増えただけで、字数を無駄に使ってしまったような気がします。シエンガオレンとかアレスとか……。

普段一人称視点型の三人称で書くことが多いのですが、少々特殊な一人称を書いてみたらおもしろいかもかもしれないと考えました。

書きにくいばかりか、情景の説明もしくい。そのため後半に行くほどティルテュ視点が増えてしまったという罨が……。

個人は好きな武器で書いてみようと思いました。

ハンマーは太刀や大剣のように見せ場となる技がなく、どうしても1撃1撃を重ねていくような戦い方になってしまいました。

ヘビィボウガンは、不必要に威力を強調してしまうとモンスターハンターの雰囲気崩してしまいかねないと、地味な運用にとどまってしまうました。おまけに、最後のとどめがライトボウガンで使っても威力の変わらない拡散弾という有様……。

そもそもこの作品は、「死神」のクエストで何故「禍々しい布」が手に入るのだろうという自分の疑問を、文明とディアブロスの生態を捏造して考えてみたものです。

本来なら短編でもいい内容かとも思いますが、テイルテュの父の話盛り込むとなると、少々嵩が増すと考えて一〇話連載としました。

皆さんの中にも、どうしてこんな内容のクエストがあるのだろうと疑問に思ったり、報酬を不思議に感じたことがあるという方がいらっしゃるのではないのでしょうか。

それと、これは一応短編集のような形をとるつもりで書いていますので、続編を考えています。ただ、今回の反省を踏まえ、余計なものは削り、アマランサス視点の書き方を改め、せめて二週間に一度の更新を目標にしたいと考えています。話数もいきなり半分は無理にしても、七、八話くらいでまとめるつもりです。

現在の予定では、次の舞台は樹海です。MHP2Gにも登場する地形ですが、せっかくですのでモンスターハンターフロンティア限定のモンスターを題材にしたいと考えています。

今回はクエストの独自解釈を話題にしましたが、今回はモンスターそのものを独自に解釈したいと考えています。

ちなみに主人公は変えますが、アマランサスはやはりというか何というか登場する予定です。

タイトルは「創痕の騎士、樹海を駆ける」になるのではないのでしょうか。

それと、まだ当分は（2010年6月現在）、このなろうで活動するつもりですので、感想はこれからも募集中です。

もちろん辛口歓迎です。誉めるところがなくて悪い点しか書けな

いという方でもぜひ。

ただ、やはり悪いなら悪いなりに、どの点がお気に召さなかったのか書き添えていただけると幸いです。

今後の参考にしますので。

ではすべて読んでいただけた方もまだ後書きしか読んでいないという方も、ご興味を持っていただけたすべての方に感謝に意を示しまして、後書きを終えたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9251i/>

MONSTER HUNTER第一章～紅衣の女中、砂漠に行く～

2011年3月23日12時10分発行